

荒砥青柳 II 遺跡

公共開発(学校用プール建設)に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1 9 9 5

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



柏川村出土文化財管理センター

荒砥青柳 II 遺跡

公共開発(学校用プール建設)に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1 9 9 5

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



▲荒砥青柳II遺跡

▼荒砥青柳II遺跡出土土器



はじめに

長い歴史と伝統に支えられた前橋市二之宮小学校では、昭和44年に建設されたプールを取り壊し、新しい位置に造り直すことになりました。試掘調査で古代の住居址のあることがわかつっていましたが、発掘の結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居址を15軒検出したのをはじめ縄文土器などを検出し、多くの成果を収めることができました。

最後になりましたが、今回の調査を実施するにあたり、多大な御理解と御協力を頂きました。学校関係の方々、並びに例年ない暑さの中、発掘調査に従事して頂きました作業員の方々に対し深く感謝申し上げる次第です。

本報告書が地域の歴史を解明する一助となり、また考古学研究の参考となれば幸いに存じます。

平成7年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長 大谷輝治

例 言

- 本書は前橋市立二之宮小学校のプール建設に伴う荒砥青柳II遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本遺跡は群馬県前橋市二之宮町1789番地ほかに所在する。

- 調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した。調査の概要は以下のとおりである。

調査担当者 狩野吉弘（前橋市埋蔵文化財発掘調査団 発掘調査係）

井野誠一（ 同 上 ）

発掘調査期間 平成6年7月13日～平成6年8月31日

報告書作成期間 平成6年9月1日～平成7年3月31日

調査面積 900m²

- 本書の原稿執筆、編集は井野、狩野が行った。整理作業をはじめ図版作成には、赤城美代子・栗岡エミ子・市川昌子・岩田敏子・生形かほる・大澤まさ江・大島きく江・大塚美智子・鬼塚成子・佐野貴恵子・柴崎まさ子・神保千代子・多田啓子・塙本富江・戸丸澄江・船津明美・松田富美子・綿貫綾子の協力があった。
- 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
(敬称略、五十音順) 加部二生、岸田治男、坂口一、杉山秀宏、細野高伯
- 遺物整理、図面作成、図面整理等は前橋市教育委員会文化財保護課で行った。
- 発掘調査で出土した遺物は前橋市教育委員会で保管している。

凡 例

- 本遺跡の略称は6E31である。

- 挿図中に使用した北は座標北である。

- 遺構の略称は次のとおりである。

H…堅穴式住居址、T…堅穴状遺構、JD…縄文土坑、D…土坑、O…落込み址、
I…井戸址、W…溝址

- 実測図の縮尺は、それぞれの図に記した。主なものは次の通りである。

遺跡全体図…1/200、遺構…1/80、遺物…1/2、1/3、1/4

- スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構： 地山 焼土範囲 炭化物範囲
遺物： 須恵器断面

- 遺物分布図に使用した記号は次のとおりである。

○…土器 △…石器・砥石 □…鉄器・金属器 ■…土錐・土玉 ●…臼玉
◎…縄文土器 ▲…縄文石器

- 表中の数値の中で、() は現存値を、[] は復元値を表す。

目 次

はじめに.....	i
例 言.....	i
凡 例.....	i
本 文	
I 調査に至る経緯.....	1
II 遺跡の立地と環境.....	1
III 調査経過.....	1
IV 層 序.....	2
V 遺構と遺物.....	4
VI ま と め.....	7

図 版

□ 絵 荒砥青柳II遺跡全景	□ 絵 荒砥青柳II遺跡出土遺物
P L . 1 遺跡全景、H-1・2・18号住居址	P L . 9 古墳～奈良・平安時代の土器(1)
P L . 2 H-2・3・4・18号住居址	P L . 10 古墳～奈良・平安時代の土器(2)
P L . 3 H-4・5・6・7号住居址	P L . 11 古墳～奈良・平安時代の土器(3)
P L . 4 H-7・9・10号住居址	P L . 12 古墳～奈良・平安時代の土器(4)
P L . 5 H-10・11号住居址	P L . 13 古墳～奈良・平安時代の土器(5)
P L . 6 H-11・13・14号住居址	P L . 14 古墳～奈良・平安時代の土器(6)
P L . 7 H-16・17号住居址、T-1号堅穴状遺構	P L . 15 古墳～奈良・平安時代の土器(7)、縄文土器
P L . 8 JD-1号縄文土坑、I-1号井戸址、W-1号溝址	P L . 16 石器・金属器・土製品

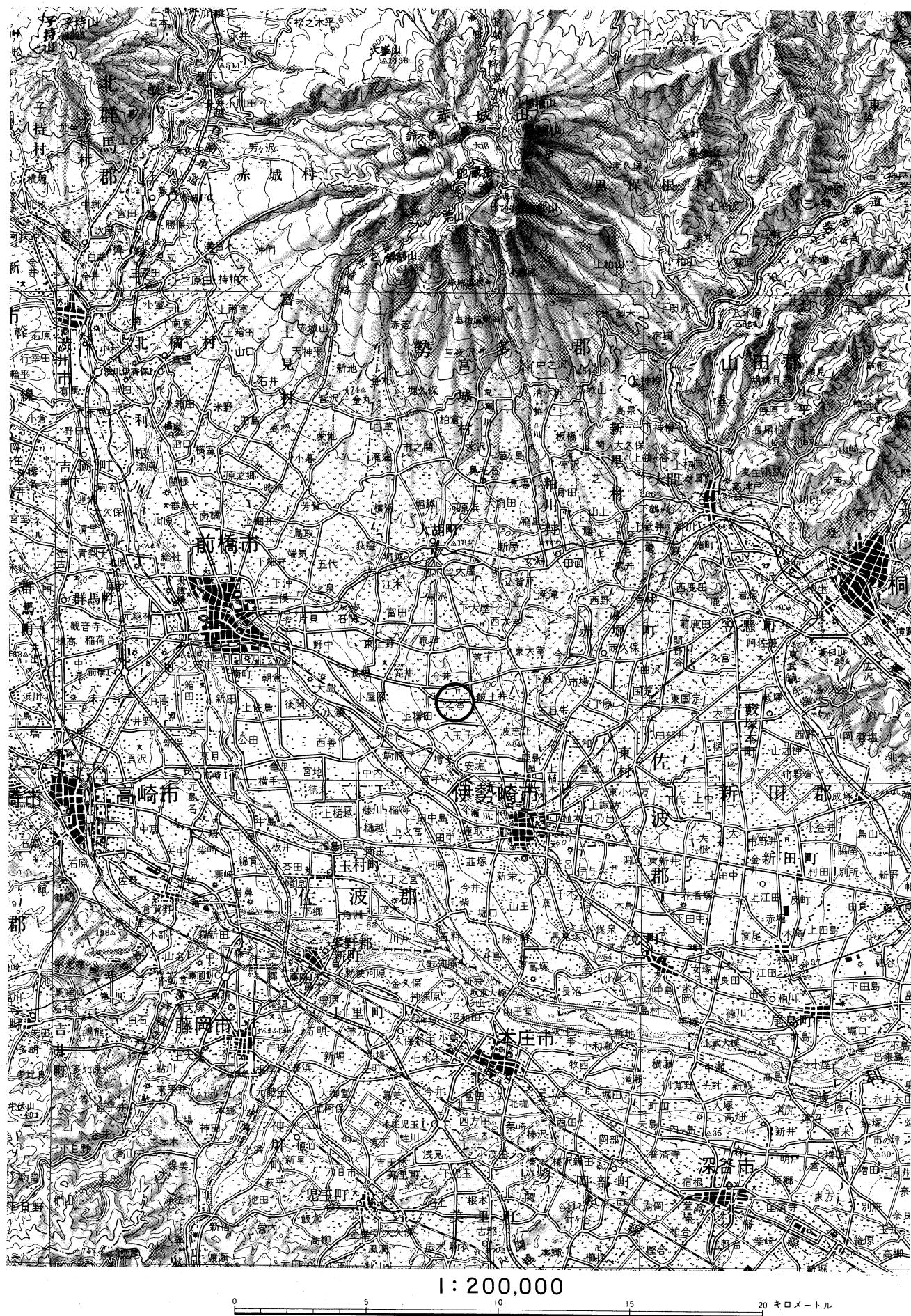
挿 図

Fig. 1 荒砥青柳II遺跡の位置	iii
Fig. 2 荒砥青柳II遺跡と周辺の遺跡	2
Fig. 3 荒砥青柳II遺跡全体図	3
Fig. 4 H-1～H-3、H-18号住居址	12
Fig. 5 H-4～H-7号住居址	13
Fig. 6 H-9～H-11号住居址	14
Fig. 7 H-13、H-14、H-16号住居址、T-1号堅穴状遺構	15
Fig. 8 H-17号住居址、O-1、JD-1、I-1・W-1・D-1～D-3	16
Fig. 9 古墳～奈良・平安時代の土器(1)	17
Fig. 10 古墳～奈良・平安時代の土器(2)	18
Fig. 11 古墳～奈良・平安時代の土器(3)	19
Fig. 12 古墳～奈良・平安時代の土器(4)	20
Fig. 13 古墳～奈良・平安時代の土器(5)	21
Fig. 14 古墳～奈良・平安時代の土器(6)、縄文土器(1)	22
Fig. 15 縄文土器(2)、石器・金属器・土製品	23

表

Tab. 1 古墳～奈良・平安時代土器観察表	9
Tab. 2 縄文土器観察表	11
Tab. 3 石器・金属器・土製品遺物観察表	11

Fig. 1 荒砥青柳 II 遺跡の位置 (○印)



1: 200,000

0 5 10 15 20 キロメートル

I 調査に至る経緯

荒砥青柳II遺跡は前橋市立二之宮小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成6年7月から8月にかけて実施された。発掘調査に至る経緯は以下のとおりである。

昭和56年度に荒砥南部ほ場整備事業に伴い、二之宮小学校の南側隣接地で埋蔵文化財発掘調査が行われ（荒砥青柳遺跡）、奈良・平安時代の住居址と溝址、井戸址、土坑等が検出された。今回の開発地はこれとほぼ隣接し、同一の遺跡内と予想されたため、平成6年4月12日に遺跡の範囲・状況について確認調査を実施した。その結果、開発地のほとんどが遺跡地であることが確認されたが、学校用プール改築という公共性に鑑み、現状保存が困難であるとのことから、協議の結果、開発区域の発掘調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存をはかることとなった。

その後、平成6年6月21日付で、発掘調査の依頼が事業課の前橋市教育委員会総務課より提出され、同年6月28日付で発掘調査の委託契約を締結し、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が発掘調査を実施することになった。また小学校校庭内の発掘となることから学校側とも協議を持ち、調査期間については、主に夏季休業中とすること、確実な安全対策を施すこと等、児童に対する安全性を配慮した発掘調査体制を敷くことが確認された。

II 遺跡の立地と環境

荒砥青柳II遺跡が所在する前橋市二之宮町は、前橋市街地の東方約9kmに位置している。赤城山の山容をほぼ真北に一望する本遺跡周辺は、広瀬川低地帯と接する赤城山麓の末端部にあたり、赤城山麓に源を発する中小の河川が小高い台地の間をゆるやかに南流している。本遺跡の位置する二之宮小学校の裏手にも、改修をおえた無名の小河川があり、小学校以南に広がる小高い台地を迂回するように北東から南西方向に流れている。本遺跡の乗る台地上では民家が密集し、おもに畠作が営まれているのに対して、この小河川の流域に形成された狭小な沖積平野ではおもに水田が営まれている。

二之宮町を含む前橋市東部の荒砥地区は、昭和50年代よりほ場整備事業ほか各種開発に伴い、埋蔵文化財の発掘調査が盛んに行われた。そのほとんどは現在整理途上にあり、詳細は不明であるが、すでに国指定の重要文化財に指定された舞台1号墳の出土品や、市指定となった荒砥富士山古墳などは注目に値する。二之宮町においては、荒砥南部ほ場整備事業と上武国道建設に伴う発掘調査が相次いで行われた。主な発掘調査を列挙すれば、荒砥前原遺跡（S51年度）、荒砥島原遺跡（25）、宮川遺跡（21）、荒砥洗橋遺跡（13）、荒砥天之宮遺跡（22）、荒砥宮西遺跡（15）[以上S55年度]、鶴ヶ谷II遺跡、荒砥大日塚遺跡（5）、荒砥青柳遺跡（23）[以上S56年度]、荒砥上ノ坊遺跡（8）[S57年度]、宮後遺跡[S58年度]、二之宮宮東B遺跡[S60年度]、二之宮宮東遺跡（20）、二之宮宮下西遺跡（18）、二之宮千足遺跡（16）、二之宮洗橋遺跡（14）、二之宮谷地遺跡（12）[以上S61年度]、宮原遺跡（24）、二之宮宮下東遺跡、[以上S62年度]などがあり、その年代も、古墳時代を中心に縄文時代から中・近世に至るまで連綿と続いている。（発掘調査が複数年度にわたる遺跡は着手年度で記した。）

こうした遺跡の集中する二之宮町は、歴史時代以降も特筆される地区である。二之宮町の『二之宮』は平安時代に国内の神社の格式を表した『一宮』・『二宮』・『三宮』の『二宮』が所在する土地であるとされ、各地の二之宮（二宮）の地名の土地には平安時代からの神社が所在する。二之宮町の赤城神社も現在は宮城村の三夜沢赤城神社の里宮であり、そこの『二宮』とも解釈できるが、古代には二之宮町の赤城神社が中心であったと考えられる。また、この赤城神社の北側、国道50号線沿いには古代の東山道が東西に走っており、群馬駅と佐位駅をつなぐ通過ルートとしての役割を果たしていた。また、平安時代末期に豪族淵名氏によって開削された女堀も町の北部で、その遺構をとどめている。

今回の調査地である二之宮小学校は、近世に郷蔵の所在していた土地で、近年校庭を南に拡張した。その校庭の南側に新設した道路部分は、ほ場整備事業に伴い昭和56年に発掘調査が実施された。調査の結果、竪穴住居址4軒、溝8条、井戸4基、土坑12基、竪穴状土坑2基を検出した。これが荒砥青柳遺跡であり、おもな遺構は、奈良時代竪穴住居址3軒、平安時代竪穴住居址1軒と同時期の溝1条とされており、他の遺構の時代は不明である。その際の結論として、検出された住居を含む集落の中心は台地のさらに北西方向にあるとの見解が示された。今回の発掘箇所は、位置的にこの方向にあたり、調査の結果、約900m²の範囲から縄文土坑1基、古墳時代後期の住居址12軒、同時期の落込み1基、奈良・平安時代の住居址3軒、同時代の竪穴状遺構1基、中・近世の溝址1条、その他の土坑3基を検出した。

荒砥青柳遺跡と比べ、中心となる住居址の時代は若干異なるものの、集落が二つの遺跡を含む台地の北部一帯に広がっていることは、ある程度確認することができた。

III 調査経過

発掘調査日誌から……

7月13日(水) バックフォー(0.4m³)にて表土掘削を開始。約50cmの掘下げで遺構面に達する。遺構面に達した地点から順次プラン確認に入る。ゴミ穴、砂場等による攪乱が目立つ。

7月18日(月) プラン確認終了。主な遺構の掘下げに入る。各遺構とも遺物量は多くなりそうだ。

8月3日(水) 地元の二之宮町を中心に、新たに4名の方が発掘作業に加わった。さらに今週は市教委総務課の応援もあり、今後の調査工程を乗り切るめどがついた。

8月15日(月) どの住居址も床面までは予想外の深さだ。今日も新たに3軒の住居址を確認した。

8月29日(月) ハイライダーによる遺跡全体写真撮影。8月30日(月) 遺構全体測量完了。8月31日(水) 全工程終了。

IV 層序

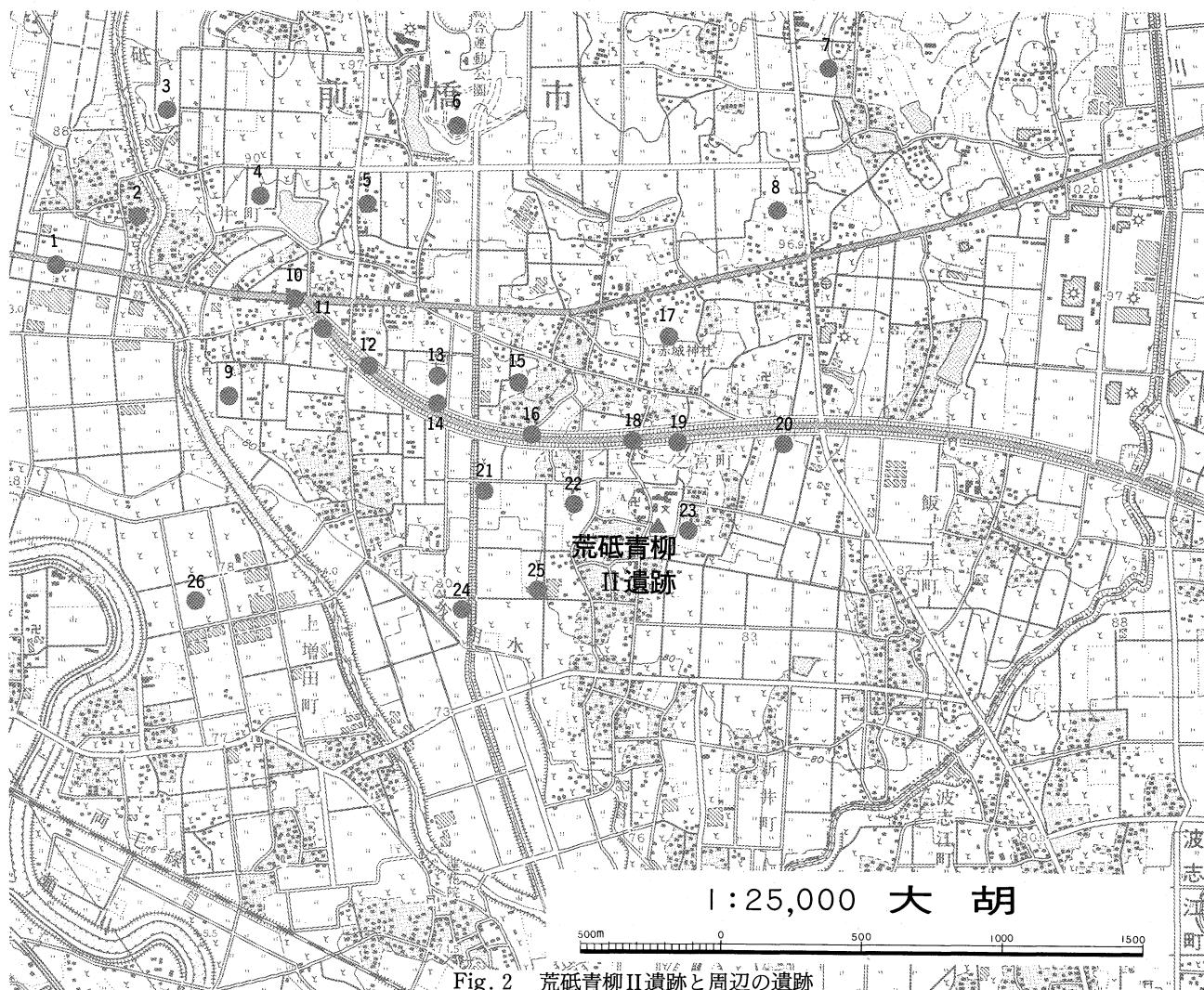
本遺跡地内で深掘りを掘った地点が、2m近くの客土層であった。ほとんどの遺構はロームを主体とした地山を掘り込んでいるが、この状況を示す良好な地点が得られなかつたため、ここでは遺構の床面までの状況を記す。

I 層：黒褐色の表土層 層厚40cm。 主な遺構と同時期の遺物も見られるが、かなり攪乱を受けている。

II 層：暗褐色のローム漸移層 層厚40cm。 ほとんどの遺構はこの上部でプラン確認できた。

III 層：黄褐色のソフトローム層 層厚不明。多くの遺構がこの層を掘り込み、床面を形成している。

なお、各層とも主要テフラの明確な堆積はみられなかった。



- 1 今井白山遺跡 2 今井城 3 荒砥北原遺跡 4 荒砥北三木堂遺跡 5 荒砥大日塚遺跡 6 鶴ヶ谷遺跡群 7 荒砥荒子遺跡 8 荒砥上ノ坊遺跡 9 今井神社古墳群 10 今井道上遺跡 11 今井道上道下遺跡 12 二之宮谷地遺跡 13 荒砥洗橋遺跡 14 二之宮洗橋遺跡 15 荒砥宮西遺跡 16 二之宮千足遺跡 17 二之宮赤城神社 18 二之宮宮下西遺跡 19 二之宮宮下東遺跡 20 二之宮宮東遺跡 21 宮川遺跡 22 荒砥天之宮遺跡 23 荒砥青柳遺跡 24 宮原遺跡 25 荒砥島原遺跡 26 中原遺跡群 ▲ 荒砥青柳II遺跡

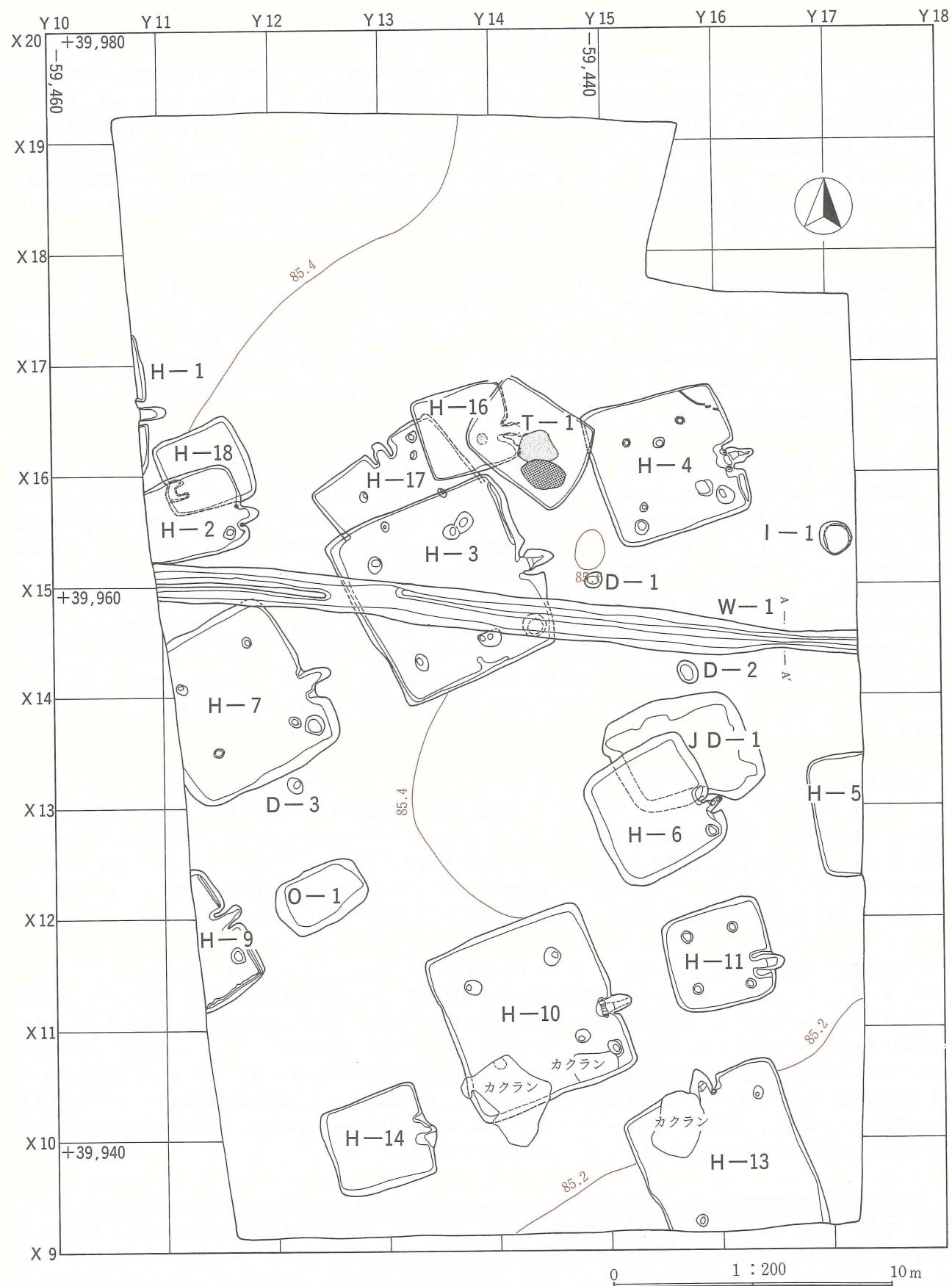


Fig. 3 荒砥青柳II遺跡全体図

V 遺構と遺物

本遺跡は、前橋市立二之宮小学校校庭内の、面積900m²という小規模な遺跡であるが、検出された遺構は古墳時代後期から平安時代にかけての堅穴住居址15軒を中心に、土坑や溝を含めると縄文時代から中・近世におよぶものである。

遺構の遺存状態は、調査区が校庭内の砂場に該当していたため、調査区北部を中心に、遺構を損なう攪乱も見受けられたが、総じて各遺構とも掘込みが深かったため、床面まで達する攪乱は数少なかった。このため、出土遺物は床面上を中心には良好な状態で取り上げることができた。本遺跡の中心をなす古墳時代後期の住居址12軒は、出土遺物から見る限り6世紀前半から7世紀後半の範囲で押さえられる。また調査区外に伸びる住居址の存在から、同時期の住居址が周囲に広がっていることが予想される。なお、H-8号、H-12号、H-15号住居址は欠番である。

H-1号住居址 (遺構図版Fig. 4) ◎位置 X16・17、Y10グリッド ◎面積 [1.17] m² ◎方位 N-86°-E
◎形状 東西不明 南北 [5.03] m。調査区の北西端から、住居の東壁部分とこれに付設する竈のみを検出。本体の中心は調査区外にあるが、形状は方形を呈するものと思われる。◎床面 調査区内では床面まで到達していないが、他の住居址と同様ソフトローム上層の暗褐色土層かまたはその下のソフトローム層まで掘り下げ、床面を形成しているものと思われる。◎竈 両袖が住居内に張り出し、燃焼部も調査区外に存する。全幅は既存部分で106cmを測る。◎遺物 プラン確認面で、土師器の小破片が数点出土したのみ。

H-2号住居址 (遺構図版Fig. 4) ◎位置 X15・16、Y10・11グリッド ◎面積 10.51m² ◎方位 N-72°-E ◎形状 一部調査区外へ延びるが、東西 [3.50] m、南北3.07mの長方形プランを呈する。◎重複 本遺構の精査中、床面下約15cmに竈の残骸と堅緻面が検出された。この堅緻面を広げると本遺構の外にほぼ正方形プランを有する住居址の存在が新たに確認された(H-18)。重複する部分では、本遺構の床面から上は遺構が残っていないため、H-18→本遺構の順に構築されたものと断定した。◎床面 ローム上層の暗褐色土層を掘り込み床面を形成している。竈周辺を中心にほぼ全面に堅緻面が広がり、深さ17cmの貯蔵穴も確認されたが、柱穴は検出できなかった。壁高は34cmを測る。◎竈 燃焼部を中心に攪乱を受け遺存状況が悪いが、住居址東壁の南寄りに付設されており、両袖の先端には土器または石材を設置していたことを裏付ける1対の窓みが認められた。両袖はあまり張り出しておらず、燃焼部はほぼ東壁ライン上にあったものと思われる。全長81cm、全幅63cm、焚口部幅38cmを測る。◎貯蔵穴 竈右脇に設置。長径48cm、短径34cm、深さ17cmを測る。◎遺物 覆土内に含まれる小破片を除き、本遺構に所属する遺物は床面上5cmから出土した土師器壺(1)1点のみである。

H-18号住居址 (遺構図版Fig. 4) ◎位置 X15・16、Y10・11グリッド ◎面積 9.16m² ◎方位 N-69°-E
◎形状 東西3.19m、南北2.90mのほぼ正方形を呈し、本遺跡中唯一、西竈を持つ住居址である。◎重複 本遺構→H-2号住居址の順に構築。◎床面 暗褐色土層とソフトローム層を掘り込み、確認面から50cmで床面に達する。床面上は多少凹凸が目立つが、ほぼ全面に堅緻面が広がっている。柱穴や貯蔵穴などは検出できなかった。◎竈 西壁、南西コーナー寄りに付設されているが、H-2号住居址との重複部分に当たるため床面から10cm以上は欠落している。全長[80]cm、全幅75cm、焚口部幅30cmを測る。◎遺物 図示できた遺物は、土師器壺(108)、土錐(④11)の2点。

H-3号住居址 (遺構図版Fig. 4) ◎位置 X13・14・15、Y12・13・14グリッド ◎面積 43.66m²
◎方位 N-65°-E ◎形状 東西6.61m、南北6.98mのほぼ正方形プランを呈する大型住居址。壁高もプラン確認面から床面までほぼ60cm前後あり、重複部分を除き、遺存状況は良好である。◎重複 ほぼ同時期の住居址H-17および中世以降の溝址W-1と重複する。構築順はH-17→本遺構→W-1の順。◎床面 ソフトローム層を掘り込み床面を形成しており、竈周辺を中心に堅緻面が広がる。また壁際には一部、周溝がめぐる。柱穴はP₁～P₅まで5本検出された。◎竈 東壁中央に付設されている。規模は全長137cm、全幅68cm、焚口部幅46cmで、燃焼部は東壁ラインより内側(住居内)に位置する。◎貯蔵穴 竈右脇、南東コーナー付近にある。規模は長径84cm、短径82cm、深さ19cmでほぼ円形を呈する。◎遺物 図示できた遺物は土師器壺(2～9)、耳環(④6)の9点。

H-4号住居址 (遺構図版Fig. 5) ◎位置 X1・16、Y14・15・16グリッド ◎面積 25.27m² ◎方位 N-73°-E
◎形状 東西5.16m、南北5.04mの正方形。◎重複 本遺構→H-15 ◎床面 暗褐色土層を掘り込み、確認面から約34cmで床面に達する。床面はほぼ平坦で特に竈付近を中心に堅緻面が広がる。北東コーナー部分では炭化した木材も検出された。柱穴はP₁～P₅まで5本検出された。◎竈 東壁や南寄りに付設。焚口部付近の両袖には土師器壺(左袖14)、右袖(16)を倒立させ使用している。全長134cm、全幅58cm、焚口部幅45cmを測る。燃焼部は東壁ラインより内側に位置する。◎貯蔵穴 竈右脇、南東コーナー付近に設置。規模は長径70cm、短径60cm、深さ60cm。◎遺物 図示できた遺物は、土師器壺(10・11)、土師器台付壺(12)、土師器壺(13・14・16・17)、土師器鉢(15)、刀子(④3)の9点である。

H-5号住居址 (遺構図版Fig. 5) ◎位置 X12・13、Y16・17グリッド ◎面積 [7.40] m² ◎方位 N-79°-E
◎形状 プランのほぼ半分が調査区外のため東西の規模は不明。南北は4.45mを測る。◎床面 暗褐色土層を掘り込み、確認面から約30cmで床面に達する。ほぼ平坦な床面であるが、堅緻面は認められず、柱穴等も検出できなかった。
◎遺物 床面直上から底部外面に墨書を施した土師器壺(18)が出土している。◎備考 出土遺物から本遺構は奈良・平安時代の住居址と考えられる。

H-6号住居址 (遺構図版Fig. 5) ◎位置 X12・13、Y14・15・16グリッド ◎面積 18.55m² ◎方位 N-61°-E
◎形状 東西4.35m、南北4.52mのほぼ正方形プランを呈する。◎重複 JD-1 → 本遺構の順に構築。◎床面 暗褐色土層とソフトローム層を掘り込み、確認面から約60cmで床面に達する。床面は平坦で、全体によく踏み固められている。貯蔵穴は検出できたが、柱穴は最後まで検出できなかつた。◎竈 東壁の南東コーナー寄りに付設。全長82cm、全幅110cm、焚口部幅22cmを測る。◎貯蔵穴 竈右脇、南東コーナー付近に設置。規模は長径46cm、短径40cm、深さ28cmを測る。◎遺物 図示できたのは土師器壺(19・20・21)、土師器甕(22)、須恵器壺(23・25)、のほか須恵器壺蓋(24)、須恵器穂(26)、円筒埴輪(27)がある。

H-7号住居址 (遺構図版Fig. 5) ◎位置 X12・13・14、Y11・12・13グリッド ◎面積 [30.88] m² ◎方位 N-57°-E
◎形状 調査区西端に位置し、一部調査区外に延びるが、東西6.10m、南北6.25mでほぼ正方形のプランを呈する。◎床面 暗褐色土層とソフトローム層を掘り込み、確認面からほぼ80cmで床面に達する。床面上は多少凹凸が認められるが、竈周辺を中心にほぼ全面に堅緻面が広がっている。P₁～P₄の4本の柱穴が検出できた。◎竈 東壁やや南寄りに付設。全長128cm、全幅154cm、焚口部幅60cmを測る。◎貯蔵穴 竈右脇、南東コーナー付近に設置。規模は長径75cm、短径68cm、深さ40cmを測る。◎遺物 図示できたものは土師器壺(28～32・35)、土師器皿(33)、手捏ね(34)、須恵器壺蓋(36)、須恵器穂(37)、砥石(④)、刀子(⑤)、土錐(⑦・8)がある。

H-9号住居址 (遺構図版Fig. 6) ◎位置 X11・12、Y11グリッド ◎面積 [7.62] m² ◎方位 N-57°-E
◎形状 調査区西端に位置し、住居址の東側部分のみの検出となった。東西[2.61]m、南北4.68mの方形。◎床面 暗褐色土層とソフトローム層を掘り込み、確認面からほぼ50cm前後で床面に達する。床面上は、竈周辺を中心に粘土や焼土の流出がおびただしい。これを除去すると、ほぼ全面に堅緻面が広がっている。◎竈 東壁ほぼ中央に付設されている。全長112cm、全幅100cm、焚口部幅50cmを測る。燃焼部は東壁ラインより内側に位置する。◎貯蔵穴 竈右脇に地山のソフトローム層を掘り込んで設置。長径58cm、短径50cm、深さ32cmを測る。◎遺物 図示できた遺物は土師器皿(38)、土師器小壺(39)の2点である。

H-10号住居址 (遺構図版Fig. 6) ◎位置 X10・11・12、Y13・14・15グリッド ◎面積 40.40m² ◎方位 N-68°-E
◎形状 一部攪乱を受けているが、東西5.96m、南北6.45mの長方形プランを呈する。◎床面 暗褐色土層とソフトローム層を掘り込み、確認面から約70cm前後で床面に達する。床面上はやや凹凸が目立つが、竈周辺を中心にほぼ全面に堅緻面が広がっている。貯蔵穴とP₁～P₄の4本の柱穴が検出できた。◎竈 東壁やや南寄りに付設されている。焚口部付近の両袖にはH-4号住居址と同じく、土師器甕(左袖68)、右袖(75)を倒立させ使用している。また、この2個の甕の間からは5個の土師器甕(いずれも20cm以下の小ぶりの長胴甕)が横倒しに連結した状態で出土していることから、これらの甕は焚口の天井部を支えるために用いられていたものと思われる。竈の規模は全長138cm、全幅74cm、焚口部幅44cmを測る。◎貯蔵穴 竈右脇、南東コーナー付近に設置されている。長径66cm、短径46cm、深さ44cmを測る。◎遺物 プラン確認当初から遺物が大量に出土し、本遺跡中最大の遺物量を記録したが(コンテナパット6箱)、相当数流れ込みの遺物が含まれているものと思われる。図示できた遺物は土師器壺(40～65)、土師器椀(66)、土師器壺(67)、土師器甕(68～78)、鎌(⑤)、土錐(⑨)である。

H-11号住居址 (遺構図版Fig. 6) ◎位置 X11・12、Y15・16グリッド ◎面積 13.34m² ◎方位 N-75°-E ◎形状 東西3.78m、南北3.66mのほぼ正方形。◎床面 暗褐色土層とソフトローム層を掘り込み、確認面からほぼ50cm前後で床面に達する。床面上は平坦で、竈周辺は堅緻面が広がっている。柱穴はP₁～P₄の4本が検出できた。
◎竈 東壁やや南寄りに付設されている。全長126cm、全幅102cm、焚口部幅26cmを測る。◎遺物 図示できた遺物は土師器壺(79)、須恵器高壺(80)、土師器甕(81)の3点で、いずれも床面直上からの出土である。

H-13号住居址 (遺構図版Fig. 7) ◎位置 X9・10、Y15・16グリッド ◎面積 [31.90] m² ◎方位 N-22°-W
◎形状 調査区の南東に位置し、一部調査区外であるが東西5.78m 南北[6.28] mの長方形を呈する。◎床面 本遺構は、全体の遺存状況が悪く、確認面から約40cmでソフトロームの床面に達してしまう。◎竈 北壁ほぼ中央に付設されており、住居内に両袖が張りだしているが、左袖付近を中心に攪乱によって損なわれている。全長110cm、焚口部幅約57cmを測る。◎遺物 全体の遺存状況が悪いのにもかかわらず、出土遺物は床面上10cm以内から数多く出土している。主な遺物は土師器壺(82～85)、土師器壺(86・87・90)、土師器甕(88・89、92～96)、土師器甕(91)の15点である。

H-14号住居址 (遺構図版Fig. 7) ◎位置 X9・10、Y12・13グリッド ◎面積 12.16m² ◎方位 N-72°-E ◎形状 東西3.71m、南北3.35mの長方形を呈する。◎床面 ソフトローム層を掘り込み、確認面からほぼ30cmで床面に達する。平坦な床面で、全体によく踏み固められている。貯蔵穴、柱穴とも検出できなかった。◎竈 東壁ほぼ中央に付設されているが、燃焼部から右袖にかけて攪乱により損なわれていた。全長84cmを測る。◎遺物 おもな遺物は、土師器壺(97~99)、土師器甕(100)、土錐(④10)の5点である。

H-16号住居址 (遺構図版Fig. 7) ◎位置 X15・16、Y13・14グリッド ◎面積 9.79m² ◎方位 N-73°-E ◎形状 東西3.25m、南北3.05mの長方形。◎重複 H-17号住居址→本遺構→H-15号住居址の順に構築。◎床面 暗褐色土層を掘り込み、確認面から約35cmで床面に達する。床面上はほぼ平坦で、竈周辺を中心に堅緻面が広がっている。◎竈 東壁やや南寄りに付設されている。全長130cm、全幅51cm、焚口部幅31cmを測る。燃焼部は東壁ラインより内側に位置する。◎遺物 図示できた遺物は、土師器壺(103・104：2点とも床面上)、臼玉(④14)の3点である。

H-17号住居址 (遺構図版Fig. 8) ◎位置 X15・16、Y12・13グリッド ◎面積 [12.22] m² ◎方位 N-36°-W ◎形状 東西5.19m、南北[2.62] mの長方形を呈する。◎重複 本遺構→H-3号住居址・H-16号住居址の順に構築。◎床面 暗褐色土層とソフトローム層を掘り抜き、確認面から約48cmで床面に達する。床面上はほぼ平坦で、竈周辺を中心に堅緻面が広がっている。床面上からは貯蔵穴、柱穴(P₁~P₄)が検出された。◎竈 北壁に付設され、全長82cm、全幅119cm、焚口部幅44cmを測る。両袖が住居址内に張り出し、燃焼部は北壁ラインより内側に位置する。◎貯蔵穴 竈右脇に設置されている。規模は長径43cm、短径34cm、深さ32cmを測る。◎遺物 図示できた遺物は、土師器壺(105・106・107)、臼玉(④15・16・17・18)の7点である。

T-1号竪穴状遺構 (遺構図版Fig. 7) ◎位置 X15・16、Y13・14グリッド ◎面積 12.84m² ◎方位 N-125°-E ◎形状 東西4.17m、南北3.24mの長方形を呈する。◎重複 H-4号住居址およびH-16号住居址と重複する。構築順はH-4、H-16→本遺構の順。◎床面 暗褐色土層を掘り込み、確認面からほぼ30cmで床面に達する。床面上に、焼土または炭化物が集中する部分が3カ所に認められた。◎遺物 床面から11cmの高さで須恵器碗(102)が出土したのみ。◎備考 竈の形跡が認められず、また須恵器碗の出土レベルからすれば流れ込みの可能性もあるが、他の遺構との重複の様子から判断すれば、最新の遺構には違いない。ここでは、奈良・平安時代の遺構としておきたい。

J D-1号縄文土坑 (遺構図版Fig. 8) ◎位置 X13・14、Y14・15・16グリッド ◎面積 [12.46] m² ◎形状等 不整形 ◎重複 古墳時代のH-6号住居址と重複する。◎床面 暗褐色土層とソフトローム層を掘り込み、確認面から53cmで床面に達する。床面上はほぼ平坦であるが、堅緻面は認められず、柱穴等も検出できなかった。◎遺物 縄文前期、諸磯b式土器を主とする土器(④1~9)および削器(④1)が床面上より出土した。

I-1号井戸址 (遺構図版Fig. 8) ◎位置 X15、Y16・17グリッド ◎形状等 平面形は長径1.20m短径1.12mの楕円形を呈する。調査では確認面から150cmまで掘り進んだが、底面には達していない。◎遺物 陶磁器や土師器の小破片が数点あるのみ。◎備考 W-1溝址と同じく中・近世に構築された遺構と考えられる。

O-1号落込み址 (遺構図版Fig. 8) ◎位置 X11・12、Y12グリッド ◎面積 6.12m² ◎形状等 東西3.34m、南北2.13mの隅丸長方形を呈する。断面形はゆるやかなU字形を呈し、確認面からの深さは中央部で60cmを測る。◎遺物 図示できなかったものの、土師器の断片が8点出土している。◎備考 底面は住居址の堅緻面同様に堅い。

W-1号溝址 (遺構図版Fig. 8) ◎位置 X14・15、Y10~17グリッド ◎形状等 最大幅1.5m、最小幅0.8mで、ほぼ直線的に調査区を東西に横断している。断面形に一貫性はなく、場所によっては溝中にさらに2本の溝が平行して走行する部分もある。◎重複 古墳時代の住居址H-3を壊して構築されている。◎遺物 土錐(④12)、土玉(④19)そのほか陶磁器、土師器の断片等。◎備考 I-1号井戸址と同様、中・近世の遺構と考えられる。

D-1号土坑 (遺構図版Fig. 8) ◎位置 X14・15、Y14グリッド ◎形状等 長径66cm、短径56cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは29cmを測る。◎遺物 土師器断片8点。

D-2号土坑 (遺構図版Fig. 8) ◎位置 X14、Y15グリッド ◎形状等 長径、89cm、短径71cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは28cmを測る。◎遺物 なし。

D-3号土坑 (遺構図版Fig. 8) ◎位置 X12、Y11グリッド ◎形状等 長径67cm、短径50cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは49cmを測る。◎遺物 なし。

VI まとめ

荒砥青柳II遺跡住居址群の変遷について

今回調査した荒砥青柳II遺跡は、時代的には縄文時代から中・近世にまで及んでいるが、その中心は古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての住居址群である。時期的には6世紀前半から8世紀後半と考えられるが、この約300年の間に、本遺跡の住居址群はどのような消長をたどったのかを探ってみたい。なお本遺跡から検出された住居址総数は15軒でH-8、H-12、H-15は欠番である。

1 住居址の構成

本遺跡の住居址群を出土遺物から5つのグループに時期区分し、さらに同時期の住居址群を大形住居址(長軸6m以上)、中形住居址(長軸6m未満~4m以上)、小形住居址(長軸4m未満)の3つに分類してみた。

- 1 期 6世紀前半代に比定できる住居址群で、大形住居址H-13、中形住居址H-17、小形住居址H-18の3軒が該当する。大形住居址H-13は縦長方形を呈し、重複のため中形住居址と分類したH-17とともに北竈を有している。一方、H-18は縦横3m前後の正方形を呈し、西竈を有する。H-13とH-17では規模や主軸方位に類似点があるが、H-18は異なる。
- 2 期 6世紀後半代に比定できる住居址群で、中形住居址H-4、H-6、小形住居址H-11、H-14の4軒が該当する。平面形はH-14のみやや縦長方形で、他は正方形を呈しているが、住居址の形態では、4軒の住居址とも東竈をもち、主軸方位も近似しているなど共通点が多い。
- 3 期 7世紀前半代に比定できる住居址群で、大形住居址H-10、中形住居址H-1、H-9の3軒が該当する。平面形はH-10が正方形を呈する。また、H-9、H-10では主軸方位が近似している。
- 4 期 7世紀後半に比定できる住居址群で、大形住居址H-3、H-7の2軒が該当する。H-3のほうが若干大きめであるが、平面形はいずれも正方形を呈しており、主軸方位や竈の位置は近似している。
- 5 期 8世紀後半代に比定できる住居址群で、中形住居址H-5、小形住居址H-2、H-16の3軒が該当する。全体の形状が判断できないH-5を除いて、H-2とH-16では規模や主軸方位が近似している。平面形はH-2が縦長方形で、H-16が正方形を呈する。

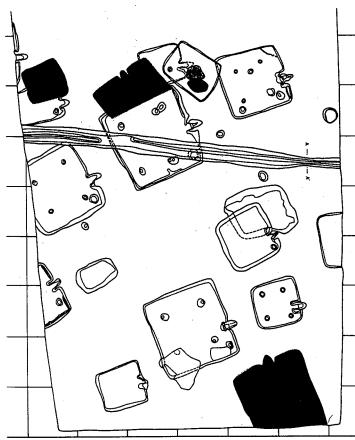


図1 6世紀前半

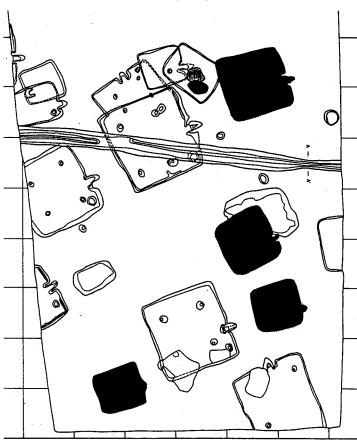


図2 6世紀後半

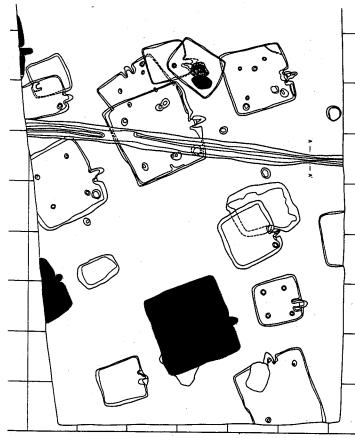


図3 7世紀前半

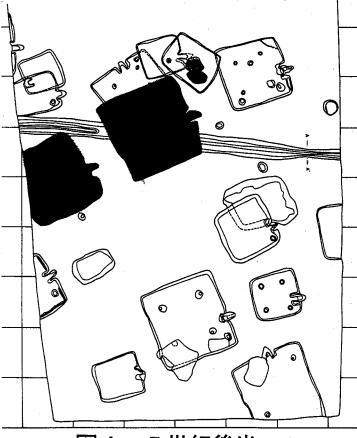


図4 7世紀後半

2 住居址の変遷

図1から図5は、本遺跡住居址群の変遷をまとめたものである。

本遺跡内に住居址が出現するのは6世紀の前半からである。(図1)出土土器から察すると、6世紀の中葉に近い時期と思われる。そして6世紀前半から7世紀後半に至るまでは、ほぼ連続して住居址が構築されている。特に6世紀後半から7世紀後半の住居址群は規模の違いはあるものの、主軸方位がほとんど近似し、規格性すら感じさせる。(図2~図4)これら古墳時代後期の住居址群とやや間を置き、8世紀後半に現れる3軒の住居址は、

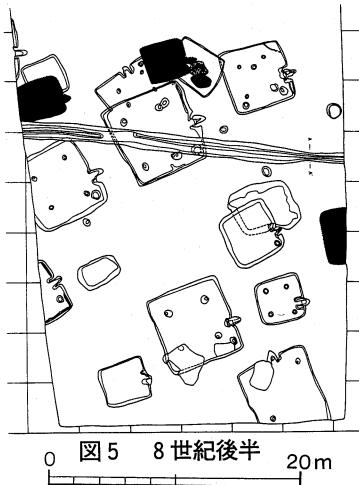


図5 8世紀後半 20m

小形住居址を中心であり、竈の形態も外竈になるなど、完全にそれ以前の住居址とは異なる様相を見せてている。(図5)

そして、本遺跡内の住居址は、この8世紀後半が最後であり、それ以後の住居址は存在しない。以上が本遺跡内における住居址の変遷であるが、狭小な調査範囲内の断片的な動向である点は否めない。例えば、本遺跡内では8世紀前半の住居址が見当たらないことに関して、これを約50年間の空白と理解するかどうかは、やはり本遺跡を内包する集落全体の視点で捉えなければならない。そこで、以下に周辺遺跡における集落の動向を概観することによって、本遺跡住居址群の変遷を集落のレベルで把握してみたい。(図6参照)

本遺跡の西方600mを南流する宮川下流域の遺跡をみると、最南端に位置する荒砥島原遺跡では宮川の沖積地を臨む微高地上に弥生時代中期後半(2世紀後半)の住居址が出現はじめる。一方これより北に位置する荒砥天之宮遺跡で住居址が出現するのは、5世紀の中葉以降である。荒砥島原遺跡の報告書によれば、(註1) 宮川下流域の集落変遷は下流域に分布する遺跡群全体の中で、居住域と農耕地との関連を考えることによって明らかになると述べている。つまり農耕地の拡大とともに、集落も沖積地周辺から台地の内部へ進出し、定着していったと捉えているのである。この農耕地の拡大の背景には、当然のことながら灌漑土木技術の向上が必要である。この点について荒砥天之宮遺跡の報告書では、同遺跡は溜井灌漑(註2)による耕地拡大を背景にした「第一次新開集落」(註3)であるとしている。古墳時代後期から出現する「第一次新開集落」はそれまで住居占地の見られなかった台地内部への進出を意味しており、二之宮宮下東遺跡、荒砥宮西遺跡など本遺跡よりもさらに北に位置する遺跡にも見受けられる。そして奈良・平安時代になると「第一次新開集落」は「伝統集落」化し、居住域は台地全体を有効に利用するようになる。以上が、周辺遺跡における集落の動向と言えよう。本遺跡は、荒砥天之宮遺跡とは無名の小河川を挟んで東岸の比較的大きな台地の北部に位置している。上述した生産域と集落変遷の図式にあてはめて考えるならば、荒砥青柳II遺跡に住居址が出現する6世紀前半(古墳時代後期)は、集落が台地縁辺から台地内部へ拡大していた時期に該当する。そして、本遺跡地内に6世紀前半を逆上する住居址が存在しないことから、図1～図4に挙げた住居址群は「新開集落」の一部である可能性が高い。この場合、想定される生産域は④の沖積地であろう。また、本遺跡地内から8世紀前半の住居址が見当たらない点については、本遺跡よりも若干台地の内部に位置する荒砥青柳遺跡から(詳細は不明であるが)奈良・平安時代を中心とした住居址群が検出されていることから、奈良・平安時代の集落がその中心を台地の内部へ移動させたため、と解釈することもできる。

3 おわりに

荒砥青柳II遺跡の住居址群の動向を把握するため、住居址群の分類を行った上で、その変遷をたどってみた。その際、生産域の拡大と集落変遷の視点から本遺跡の位置付けを行ってみた。その結果、まず6世紀前半から7世紀後半まで継続する古墳時代後期の住居址群は、周辺遺跡の動向からしても「第一次新開集落」と考えられること、また、それ以後の奈良・平安時代の住居址群の動向については、台地内部への定着の過程で、集落の南方向への移動が想定されることなどが結論として得られた。

註1 『荒砥島原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983年

2 導水路を設置して井戸の湧水を農業用水化するもので、古墳時代後期の「第一次新開集落」の出現に際しては生産域拡大の技術的な背景となったと考えられている。

3 『新里村の遺跡』(新里村教育委員会 1984年)によれば、赤城山南麓における農耕集落の変遷過程で、弥生時代後期から成立する「伝統集落」とは別に、溜井灌漑技術の発達に伴い6世紀代の鬼高峰期から成立し、平安時代にまで継続する遺跡を「第一次新開集落」と呼んでいる。

参考文献

- 1 坂口一「古墳時代後期の土器の編年 一三ツ寺遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係ー」『群馬文化』208号 1986
- 2 坂口一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年 一住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討ー」『群馬県史研究』第24号 1986
- 3 『荒砥島原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983年
- 4 『荒砥天之宮遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
- 5 『峯岸遺跡ー里棲み集落の発掘調査ー』 新里村教育委員会 1985年
- 6 『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989年
- 7 『今井道上遺跡』 建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994年

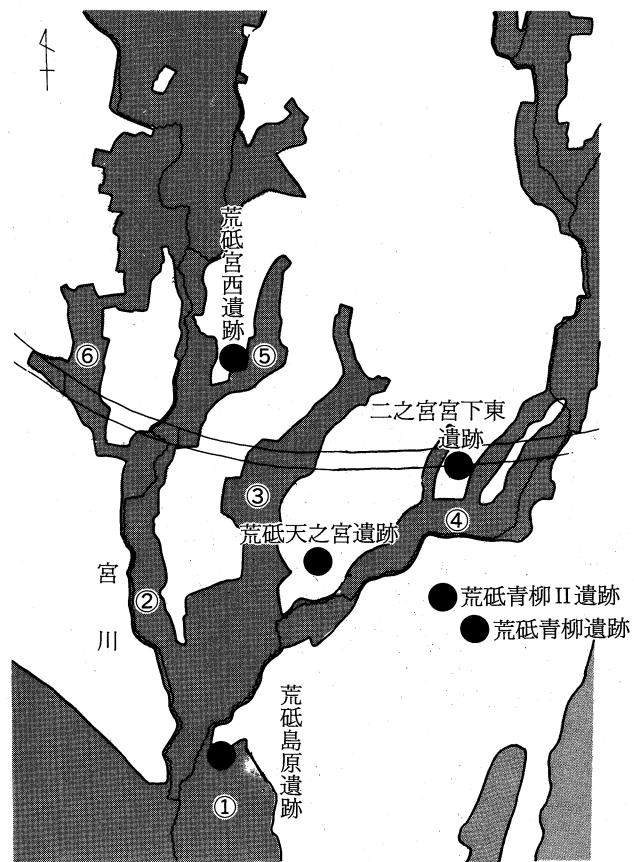


図6 荒砥青柳II遺跡と周辺の遺跡群
『荒砥天之宮遺跡』、P269「343図宮川流域の遺跡群」に加筆。

Tab. 1 古墳～奈良・平安時代 土器観察表

番号	出土位置	器形	大きさ		①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法		備考	Fig
			口径	器高		口縁・胴部	底 部		
1	H-2	土師器壺	12.2	3.2	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	素縁口縁。	9
2	H-3	土師器壺	10.1	3.2	①細粒②良好③黄橙④ほぼ完形	直立、横ナデ。	箆ケズリ。	9	
3	H-3	土師器壺	10.2	3.3	①細粒②良好③黄橙④ほぼ完形	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	9	
4	H-3	土師器壺	10.6	3.5	①細粒②良好③黄橙④3/4	直立、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	9
5	H-3	土師器壺	10.6	3.4	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	直立、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	9
6	H-3	土師器壺	12.6	4.0	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	9
7	H-3	土師器壺	13.0	4.3	①細粒②良好③黄橙④2/3	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	9	
8	H-3	土師器壺	13.9	5.3	①細粒②良好③にぶい橙④3/4	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	9	
9	H-3	土師器壺	10.2	3.3	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	直立、横ナデ。	箆ケズリ。	9	
10	H-4 竈	土師器壺	11.2	4.1	①細粒②良好③灰黄褐④4/5	外傾、有段、外稜を有す。	箆ケズリ。	内外面とも吸炭。	9
11	H-4	土師器壺	10.7	3.5	①細粒②良好③黄橙④4/5	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	外稜あり。	9
12	H-4	土師器台付甕	14.9	16.8	①中粒②良好③にぶい赤褐④ほぼ完形	外反。胴部箆ケズリ。	脚部箆ケズリ。	9	
13	H-4	土師器甕	22.5	40.0	①中粒②良好③にぶい橙④4/5	横ナデ。胴部外面箆ケズリ、砂粒の移動顕著。胴部内ナデ。		9	
14	H-4 竈	土師器甕	21.3	35.9	①中粒②良好③橙④完形。	横ナデ。胴部外面箆ケズリ、砂粒の移動大。内ナデにより器表面密。竈左袖に使用。		9	
15	H-4	土師器鉢	31.3	19.0	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	横ナデ。胴部外面箆ケズリ、砂粒の移動大。胴部内ナデにより器表面密。		9	
16	H-4 竈	土師器甕	21.5	38.3	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	横ナデ。胴部外面箆ケズリ、砂粒の移動大。内ナデにより器表面密。竈右袖。		9	
17	H-4 竈	土師器甕	22.5	40.2	①中粒②良好③にぶい橙④4/5	横ナデ。胴部外面箆ケズリ、器表面粗。内ナデ。胎土に黒雲母含有。		10	
18	H-5	土師器壺	(13.3)	3.2	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	やや内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	底部外面に墨書。	9
19	H-6	土師器壺	(13.8)	[5.5]	①細粒②極良③暗赤褐④1/4	やや外反、有段、外稜有す。	箆ケズリ。	内外面煤付着。	10
20	H-6 竈	土師器壺	(14.8)	[4.7]	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	やや外反、横ナデ。	箆ケズリ。	摩耗が激しい。	10
21	H-6	土師器壺	(12.6)	3.3	①細粒②良好③暗赤褐④2/3	端部外反、底部との境に3本の沈線。底部箆ケズリ。内外面、煤付着。		10	
22	H-6	土師器甕	(16.0)	[5.1]	①細粒②良好③浅黄橙④口縁部のみ	外反、横ナデ。胴部欠損。	欠損。	10	
23	H-6	須恵器壺	9.3	[6.4]	①細粒②極良③灰白④口縁	頸部	鋭く外反。轆轤。	欠損。	10
24	H-6 埋	須恵器壺蓋	—	[1.9]	①細粒②良好③灰白④天井部のみ	水平気味の天井部。			10
25	H-6	須恵器壺	(3.6)	[4.2]	①細粒②良好③灰黄④1/5	やや内反、轆轤。	欠損。		10
26	H-6 埋	須恵器甕	—	[7.0]	①細粒②良好③灰④胴部のみ	中央部に櫛歯状工具による刺突文。			10
27	H-6 埋	埴輪	—	[7.0]	①中粒②良好③橙④胴部	外面・縦ハケメ、突帯貼付。内面:ナデ。			10
28	H-7	土師器壺	(18.3)	[6.2]	①細粒②良好③橙④約1/2	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。		10
29	H-7	土師器壺	13.3	4.6	①細粒②良好③橙④完形	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	口縁部指押え。	10
30	H-7	土師器壺	9.5	3.2	①細粒②良好③にぶい橙④完形	短く内湾、横ナデ。	箆ケズリ。		10
31	H-7	土師器壺	9.6	3.4	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	短く内湾、横ナデ。	箆ケズリ。		10
32	H-7	土師器壺	13.2	4.7	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。		10
33	H-7	土師器皿	(19.3)	3.9	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	外傾、端部で外反。	横方向の箆ケズリ。		10
34	H-7	手捏ね	8.9	4.5	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	指押さえ後横ナデ。	指押さえ。		10
35	H-7	土師器壺	(19.4)	(8.7)	①細粒②良好③橙④1/3	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	箆に近い。	10
36	H-7	須恵器壺蓋	(20.7)	3.0	①中粒②不良③灰白④2/3	ほぼ偏平な天井部。内傾するカエリ。つまみ部欠損。			10
37	H-7 埋	須恵器甕	—	[9.4]	①細粒②良好③灰④体部のみ	体部カキメ調整後、櫛歯状工具による刺突文。			10
38	H-9	土師器皿	13.0	(2.9)	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	端部外反、横ナデ。	箆ケズリ。	外稜を有す。	10
39	H-9	土師器小壺	(10.8)	(10.8)	①細粒②極良③橙④1/2弱	ほぼ直立、横ナデ。箆ケズリ。箆ケズリ。内面丁寧なナデにより器表面密。			10
40	H-10	土師器壺	10.7	3.4	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
41	H-10	土師器壺	10.0	2.9	①細粒②良好③橙④完形	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
42	H-10	土師器壺	10.9	3.2	①細粒②良好③にぶい橙④完形	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	内面、漆付着。	11
43	H-10	土師器壺	10.7	3.5	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
44	H-10	土師器壺	10.2	3.1	①細粒②良好③橙④完形	短く内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	素口縁	11
45	H-10	土師器壺	10.8	3.7	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	短く外反、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
46	H-10	土師器壺	10.7	3.5	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	直立、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
47	H-10	土師器壺	10.8	3.9	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
48	H-10	土師器壺	10.1	2.7	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	内傾、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
49	H-10	土師器壺	11.2	3.7	①細粒②良好③明赤褐④3/4	直立、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
50	H-10	土師器壺	10.6	3.5	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	素口縁。頭著な歪み。	11
51	H-10	土師器壺	11.5	4.2	①細粒②良好③橙④4/5	短く外反、横ナデ。	箆ケズリ。	外稜有り。頭著な歪み。	11
52	H-10	土師器壺	11.0	3.9	①細粒②良好③明赤褐④完形	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	外稜有り。	11
53	H-10	土師器壺	11.1	3.5	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	短く外反、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
54	H-10	土師器壺	11.3	4.0	①細粒②良好③明赤褐④2/3	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	稜有り。	11
55	H-10	土師器壺	10.9	3.1	①細粒②極良③にぶい橙④ほぼ完形	短く外反、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
56	H-10	土師器壺	10.8	3.0	①細粒②良好③にぶい橙④3/4	ほぼ直立、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
57	H-10	土師器壺	11.8	4.1	①細粒②良好③にぶい橙④4/5	ほぼ直立、横ナデ。	箆ケズリ。	わずかに稜を有す。	11
58	H-10	土師器壺	12.4	4.1	①細粒②良好③橙④3/4	短く直立、横ナデ。	箆ケズリ。	素口縁。	11
59	H-10	土師器壺	15.3	6.6	①細粒②良好③赤褐④3/4	外反、横ナデ。	箆ケズリ。	明瞭な稜。	11
60	H-10	土師器壺	13.9	4.4	①細粒②良好③にぶい赤褐④3/4	外傾、横ナデ。	箆ケズリ。	素口縁。	11
61	H-10	土師器壺	13.2	4.7	①細粒②良好③橙④完形	内湾、横ナデ。	箆ケズリ。	素口縁。	11
62	H-10	土師器壺	11.8	4.5	①細粒②極良③橙④2/3	短く内湾、横ナデ。	箆ケズリ後ミガキ。	内面、放射状暗文。	11
63	H-10	土師器壺	16.4	7.4	①細粒②良好③橙④4/5	直立、横ナデ。	箆ケズリ。	素口縁。	11

番号	出土位置	器形	大きさ		①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法		備考	Fig
			口径	器高		口縁・脣部	底部		
64	H-10	土師器坏	11.2	3.0	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	直立、横ナデ。	箇ケズリ。	稜有り。	11
65	H-10	土師器坏	11.6	4.2	①細粒②良好③赤橙④ほぼ完形	短く外傾、横ナデ。	箇ケズリ。	内面、放射状暗文。	11
66	H-10	土師器椀	23.8	10.7	①中粒②良好③にぶい橙④2/3	外反、横ナデ。	箇ケズリ。	箇ケズリ。口唇部に注ぎ口状の歪み有り。	11
67	H-10	土師器壺	9.4	[8.0]	①細粒②不良③にぶい赤橙④1/3	横ナデ。	箇ケズリ。器表面の剥離顯著。底部欠損。	底部欠損。	11
68	H-10竈	土師器甕	20.2	17.8	①粗粒②良好③明赤褐④完形	横ナデ。	箇ケズリ。器表面粗。内面ナデ。	竈左袖に使用。	11
69	H-10	土師器甕	16.7	21.5	①中粒②良好③にぶい橙④1/2	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデにより器表面密。	11	
70	H-10	土師器甕	16.0	25.3	①細粒②良好③明赤褐④2/3	横ナデ。	箇ケズリ。内面ナデにより器表面密。	11	
71	H-10	土師器甕	(22.4)	[34.1]	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動が大。内面ナデにより器表面密。	12	
72	H-10竈	土師器甕	18.0	24.3	①中粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデにより器表面密。竈天井部構築材。	12	
73	H-10竈	土師器甕	15.8	23.5	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデにより器表面密。竈天井部構築材。	12	
74	H-10	土師器甕	20.8	[33.9]	①中粒②良好③にぶい橙④底部欠損	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動顯著。内面ナデだが砂粒が浮く。	12	
75	H-10竈	土師器甕	19.2	35.8	①細粒②良好③浅黄④2/3	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動が大。内面ナデにより器表面密。竈右袖に使用。	12	
76	H-10竈	土師器甕	19.8	[23.8]	①中粒②良好③浅黄④底部欠損	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデだが砂粒が浮く。吸炭。竈天井部構築材。	12	
77	H-10竈	土師器甕	18.0	[20.6]	①粗粒②良好③にぶい橙④口縁～脣部	横ナデ。	箇ケズリ。器表面粗。内面ナデにより器表面密。竈天井部構築材。	12	
78	H-10竈	土師器甕	18.9	[20.5]	①細粒②良好③にぶい橙④口縁～脣部	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動顯著。内面ナデだが砂粒が浮く。吸炭。竈天井部構築材。	12	
79	H-11	土師器坏	12.4	4.4	①細粒②良好③橙④2/3	外傾、横ナデ。	箇ケズリ。	稜を有す。	13
80	H-11	須恵器高坏	13.4	[4.5]	①中粒②良好③褐灰④坏部のみ	外傾、輶轆。	稜を有す。底部に透孔形成時の工具痕有り。	13	
81	H-11	土師器甕	10.6	10.0	①細粒②良好③橙④完形	ほぼ直立、横ナデ。	箇ケズリ。箇ケズリ。	口縁部指頭痕。	13
82	H-13	土師器坏	11.0	4.5	①細粒②良好③にぶい橙④3/4	内傾、横ナデ。	箇ケズリ。	明瞭な稜を有す。	13
83	H-13	土師器坏	11.0	4.8	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	内傾、横ナデ。	箇ケズリ。	13	
84	H-13	土師器坏	11.9	4.1	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	内傾、横ナデ。	箇ケズリ。	内外面吸炭。	13
85	H-13	土師器坏	12.9	4.9	①細粒②良好③にぶい橙④完形	外傾、有段、横ナデ。	箇ケズリ。	明瞭な稜。	13
86	H-13	土師器壺	13.2	15.2	①中粒②良好③にぶい橙④3/4	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデにより器表面密。	13	
87	H-13竈	土師器壺	12.8	13.0	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデにより器表面密。	13	
88	H-13	土師器甕	14.0	[18.2]	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデにより器表面密。	13	
89	H-13	土師器甕	(15.3)	15.2	①細粒②良好③にぶい橙④3/4	横ナデ。	箇ケズリ。内面ナデ後、縦方向箇ミガキにより器表面密。	13	
90	H-13	土師器壺	14.5	[17.0]	①細粒②良好③明褐灰④底部欠損	横ナデ、有段。	箇ケズリ。内面ナデにより器表面密。	13	
91	H-13	土師器甕	19.1	12.6	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	横ナデ。	箇ケズリ。(口縁部に工具痕)。内面ナデにより器表面密。	13	
92	H-13竈	土師器甕	16.2	[26.9]	①細粒②良好③橙④1/2	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデ。	13	
93	H-13竈	土師器甕	16.3	[19.6]	①中粒②良好③橙④脣部下位以下欠損	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒を多量に含む。内面ナデだが砂粒が浮く。竈右袖に使用。	13	
94	H-13	土師器甕	18.9	34.1	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒の移動大。内面ナデ、輪積痕。	13	
95	H-13	土師器甕	20.2	[35.2]	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	横ナデ。	箇ケズリ。砂粒を多量に含み移動が顯著。内面ナデだが砂粒が浮く。	14	
96	H-13	土師器甕	(21.2)	40.2	①中粒②良好③にぶい橙④3/4	横ナデ。	箇ケズリ。器表面粗。内面ナデ。	14	
97	H-14	土師器坏	11.7	4.2	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	内傾、横ナデ。	明瞭な稜。箇ケズリ。	内外面吸炭。	14
98	H-14	土師器坏	12.9	3.7	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	内湾、横ナデ。	稜有り。箇ケズリ。	内外面吸炭。	14
99	H-14	土師器坏	(12.8)	[4.9]	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	端部外反、横ナデ。	稜有り。箇ケズリ。	内外面吸炭。	14
100	H-14	土師器甕	(13.0)	[8.5]	①細粒②極良③橙④1/3底部欠損	横ナデ。	箇ケズリ。内面横方向箇ケズリ。内面ていねいななナデ。	内外面とも器表面密。	14
101	H-14	土師器甕	12.0	14.1	①細粒②極良③明赤褐④3/4	横ナデ、有段。	箇ケズリ。内面ていねいなナデ。	内外面とも器表面密。	14
102	T-1	須恵器椀	15.2	4.3	①細粒②良好③明黄褐④3/4	外傾、端部短く外反、輶轆。	右回転糸切り痕。	14	
103	H-16	土師器坏	12.8	3.4	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	短く内湾、横ナデ。	箇ケズリ。	素口縁。	14
104	H-16	土師器坏	12.6	3.6	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	内湾ぎみ、横ナデ。	箇ケズリ。	素口縁。	14
105	H-17	土師器坏	12.0	4.4	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	内傾、横ナデ。	稜有り。箇ケズリ。	内面放射状暗文。	14
106	H-17	土師器坏	11.8	4.5	①細粒②良好③橙④完形	外傾、横ナデ。	明瞭な稜。箇ケズリ。	内面ていねいなナデ。	14
107	H-17	土師器坏	(18.2)	[9.0]	①細粒②良好③橙④1/3	外傾、有段、横ナデ。	箇ケズリ。	内面黑色処理。?稜有り。	14
108	H-18	土師器坏	(12.5)	4.5	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	外傾稜有り、横ナデ。	箇ケズリ。	内外面吸炭。	14
109	表 採	須恵器坏蓋	—	[2.8]	①細粒②良好③暗青灰④約1/6	なだらかな天井部。	つまみ部欠損。『而』?の刻書	14	

註 観察表の記載は以下の基準で行った。

1 胎土は細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特殊な鉱物が入る場合には鉱物名を記載した。

2 焼成は極良・良好・不良の3段階で

3 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。

4 大きさの単位はcmであり、現存値を[]、復元値を()で示した。

Tab. 2 繩文土器観察表

番号	出土位置	①胎 土②焼 成③色 調④残 存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考	Fig
1	J D - 1	①中粒②良好③にぶい橙④口縁部	2 単位の大きく張り出した波状口縁。地文に縄文RLを施し、2本1組の半截竹管により4本の平行沈線と線が描かれる。突起部は曲線が入り組なっている。	諸磯 b 式	14
2	J D - 1	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	1と同一個体。地文に縄文RL。その上に2本1組の半截竹管で平行沈線が入る。	諸磯 b 式	14
3	J D - 1	①中粒②良好③明黄褐④口縁部	地文に縄文RL。その上に2~3条の浮線文が貼り付けられ、斜め方向の刻みが入る。	諸磯 b 式	14
4	J D - 1	①中粒②極良③にぶい橙④口縁部	口縁部が内側に屈曲する。縄文RL。	諸磯 b 式	15
5	J D - 1	①中粒②良好③にぶい赤褐④口縁部	口縁部に短い粘土が2個一組で貼付されている。口縁部に3~4条の強いナデがある。	加曾利B	15
6	J D - 1	①中粒②良好③にぶい赤褐④胴部	地文に縄文RL。4~5条の横位沈線が入る。	諸磯 b 式	15
7	J D - 1	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	地文に縄文RL。半截竹管による6本の平行沈線が入る。	諸磯 b 式	15
8	J D - 1	①中粒②良好③にぶい褐④胴部	7と同一固体。地文に縄文RL。半截竹管による平行沈線が入る。	諸磯 b 式	15
9	J D - 1	①中粒②良好③橙④胴部	地文に縄文RL。半截竹管による平行沈線とこれに沿って連続する刺突が入る。	諸磯 b 式	15

註 表の記載は以下の基準で行った。

1 胎土は、細粒(0.9mm)、中粒(1.0~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特別な鉱物が入る場合には鉱物名を記載した。

2 焼成は極良・良好・不良の3段階で評価した。

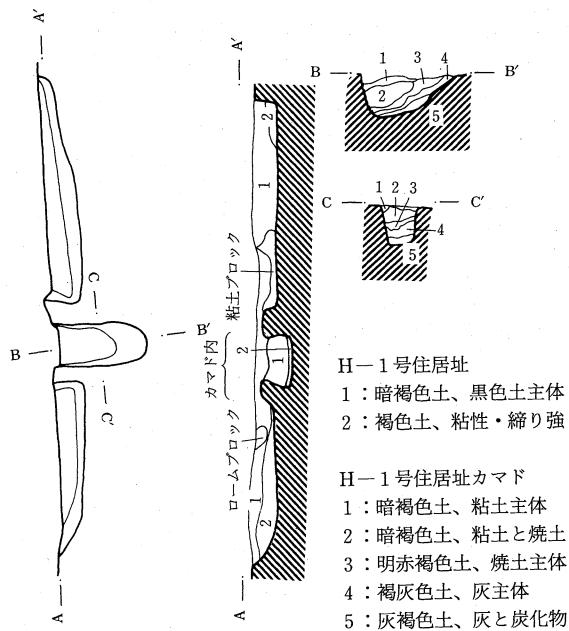
3 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原)によった。

Tab. 3 石器・金属器・土製品遺物観察表

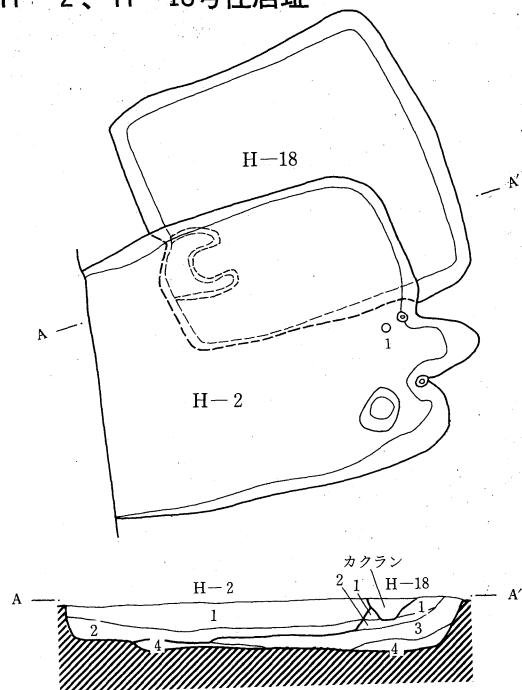
番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	備考	Fig
1	J D - 1	削器	10.5	4.6	1.2	55.0	頁岩	15
2	H - 7	砥石	6.8	2.7	2.3	35.0	2面使用	15
3	H - 4	刀子	[8.0]	1.6	1.9	9.8	鉄	15
4	H - 7	刀子	[12.0]	1.8	0.5	17.0	鉄	15
5	H - 10	鎌	[22.1]	5.2	0.3	190.4	鉄	15
6	H - 3	耳環	直径2.2	厚さ0.5	—	重さ9.8	青銅	15
7	H - 7	土錐	[2.3]	1.6	—	6.2		15
8	H - 7	土錐	[1.9]	1.1	—	2.0		15
9	H - 10	土錐	[2.5]	1.3	—	2.9		15
10	H - 14	土錐	5.6	1.6	—	9.8	完形	15
11	H - 18	土錐	6.4	1.7	—	9.8	完形	15
12	W - 1	土錐	[3.6]	1.7	—	9.1		15
13	表採	土錐	[1.8]	1.4	—	1.8		15
14	H - 16	臼玉	直径1.3	厚さ0.6	—	重さ2.0	ほぼ完形	15
15	H - 17	臼玉	直径1.4	厚さ0.8	—	重さ2.1	完形	15
16	H - 17	臼玉	直径1.4	厚さ0.7	—	重さ2.2	完形	15
17	H - 17	臼玉	直径1.4	厚さ0.8	—	重さ2.0	ほぼ完形	15
18	H - 17	臼玉	直径—	厚さ0.6	—	重さ1.0	残1/3	15
19	W - 1	土玉	直径1.3	厚さ1.1	—	重さ1.6	完形	15
20	表採	土玉	直径—	厚さ0.5	—	重さ1.4		15

註)表の記載で、大きさと重さについての単位はcm、gであり、現存値は[]で示した。

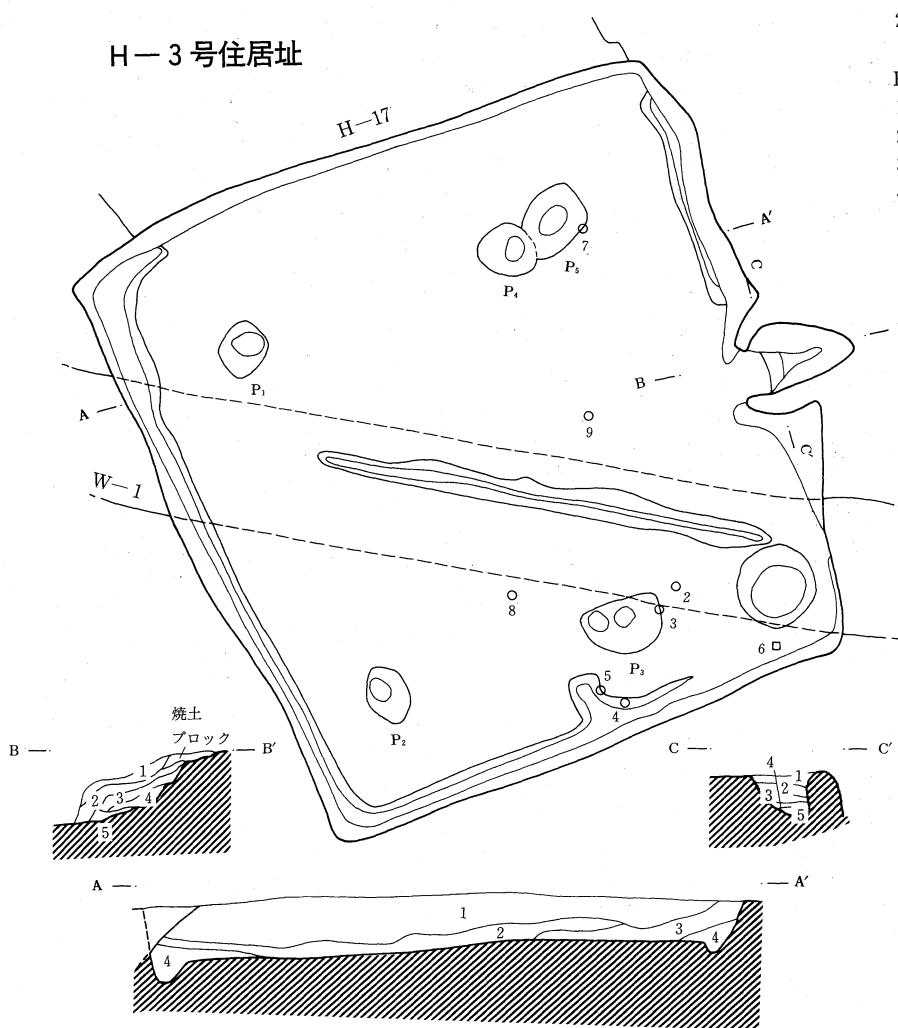
H-1号住居址



H-2、H-18号住居址



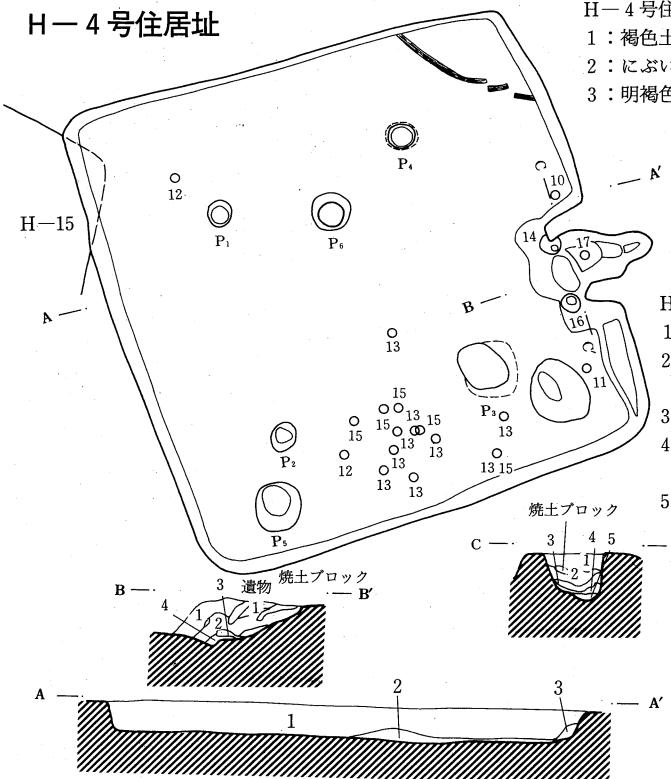
H-3号住居址



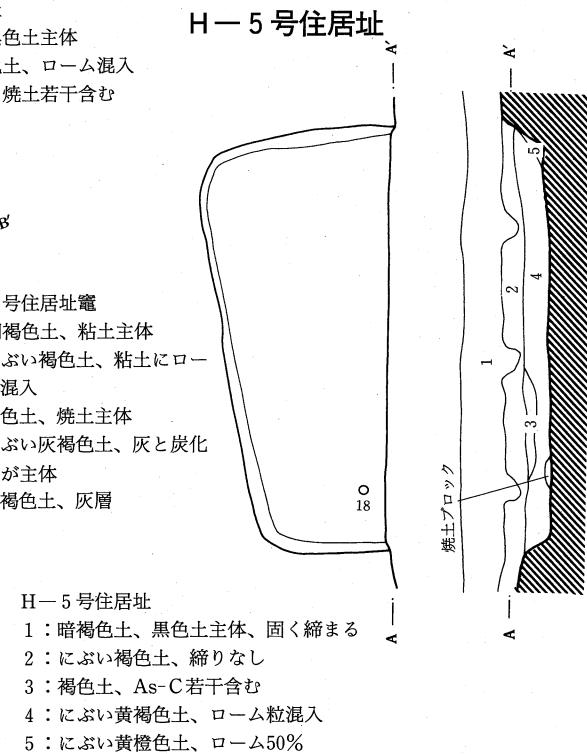
0 1:80 2m

Fig. 4 H-1~H-3、H-18号住居址

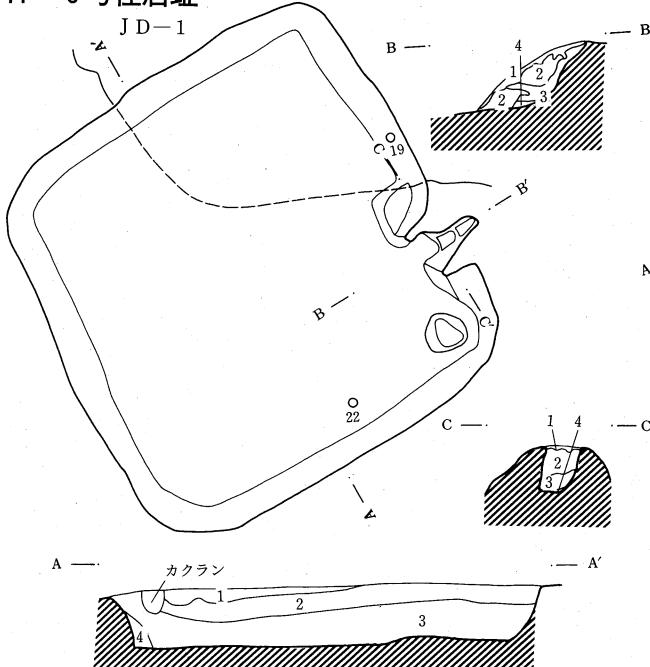
H-4号住居址



H-5号住居址



H-6号住居址



H-7号住居址

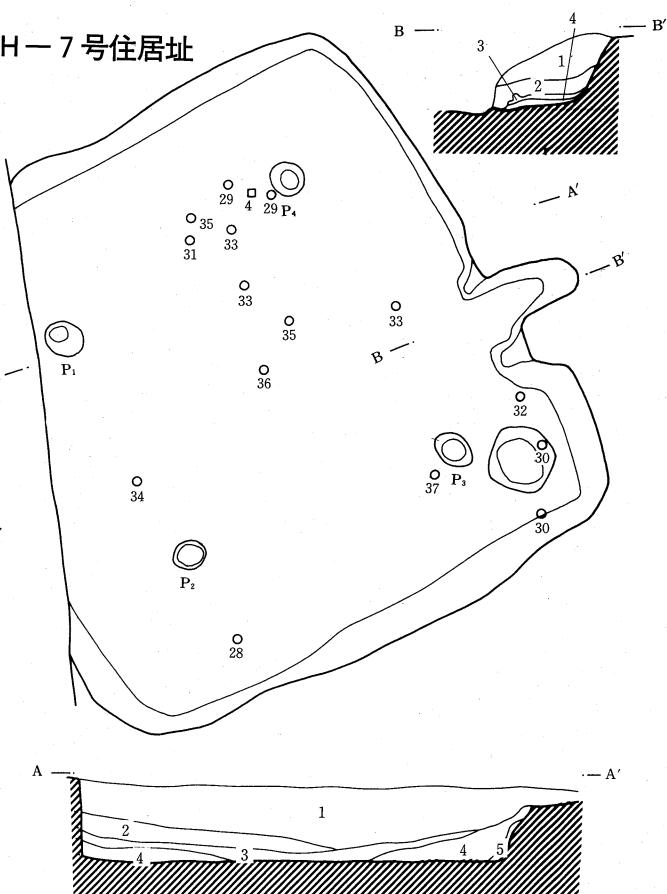


Fig. 5 H-4～H-7号住居址

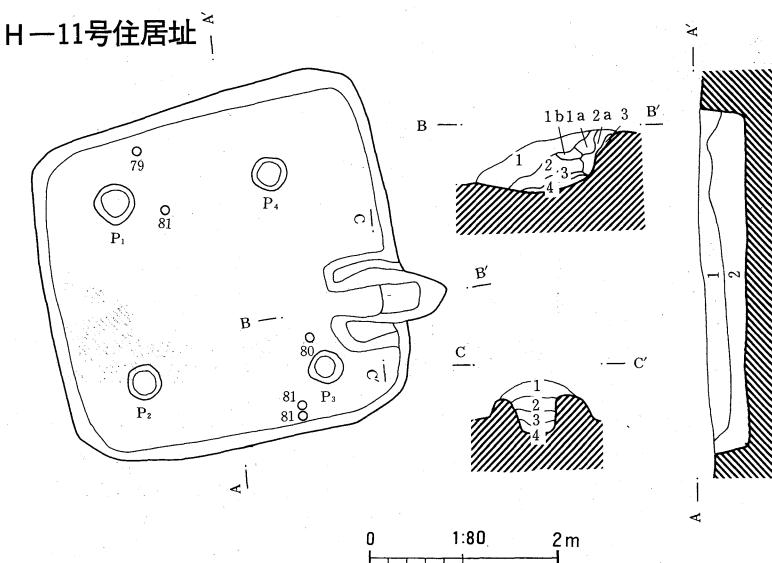
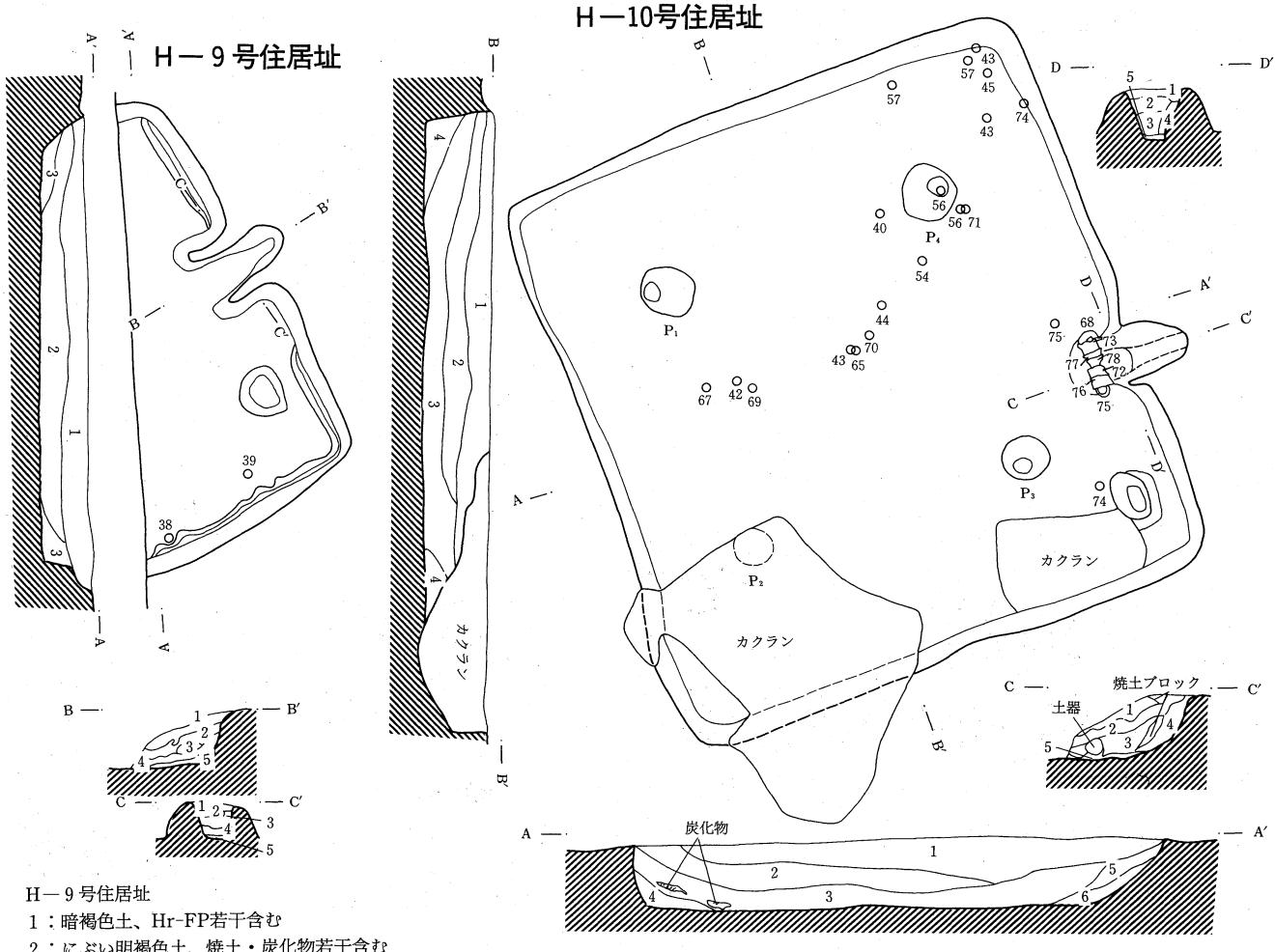


Fig. 6 H-9～H-11号住居址

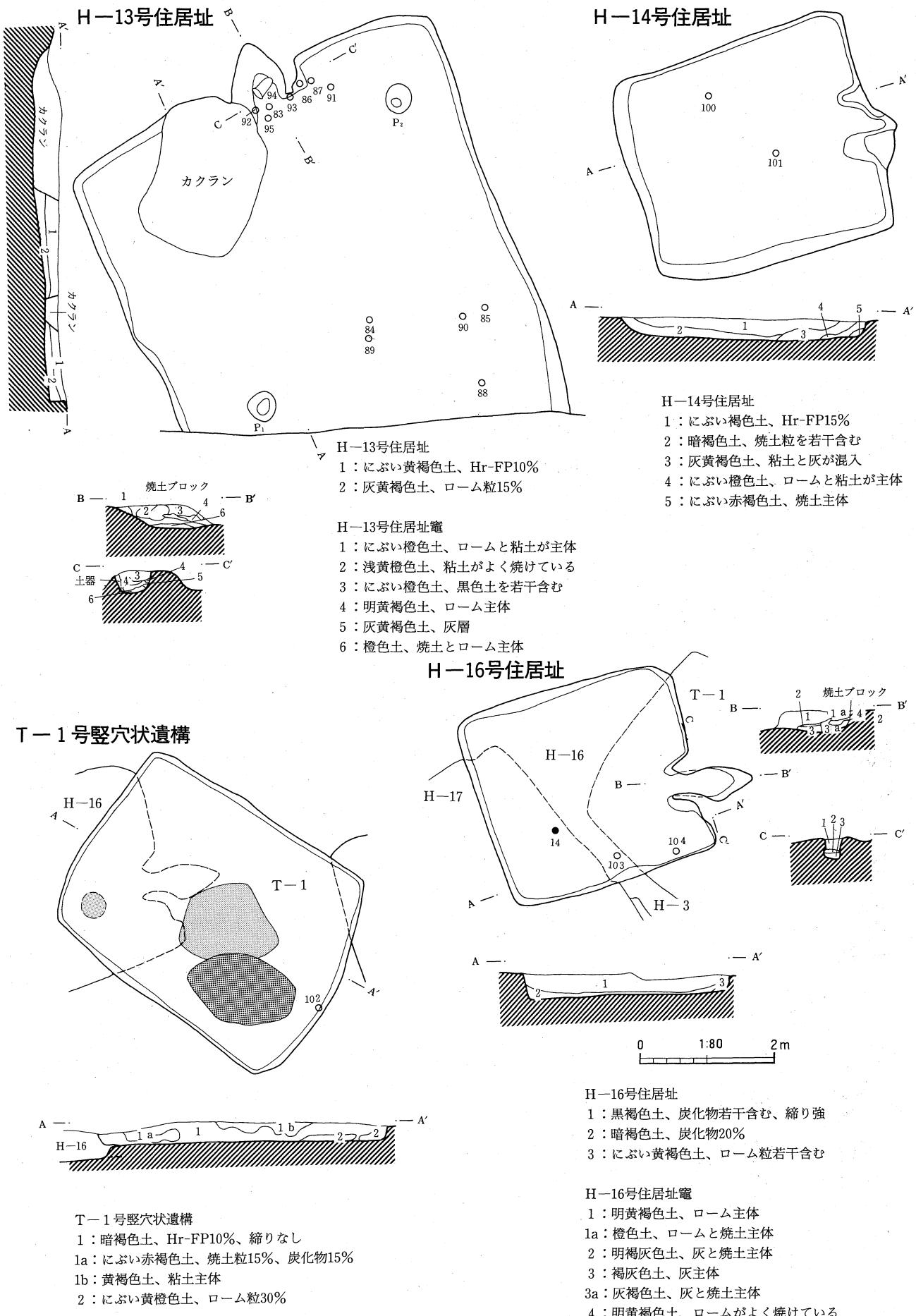
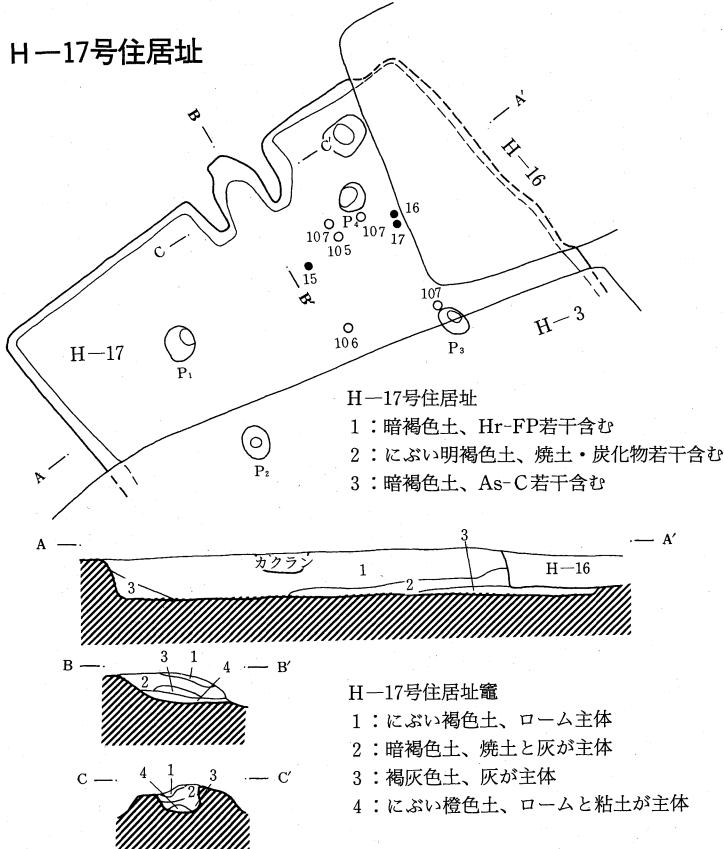
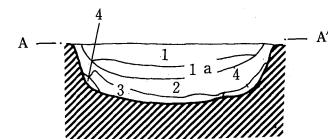
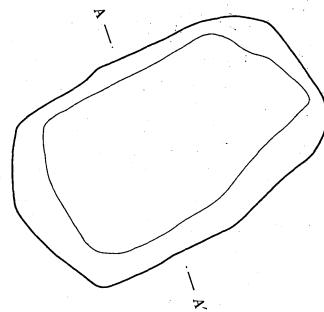


Fig. 7 H-13、H-14、16号住居址、T-1号竪穴状遺構

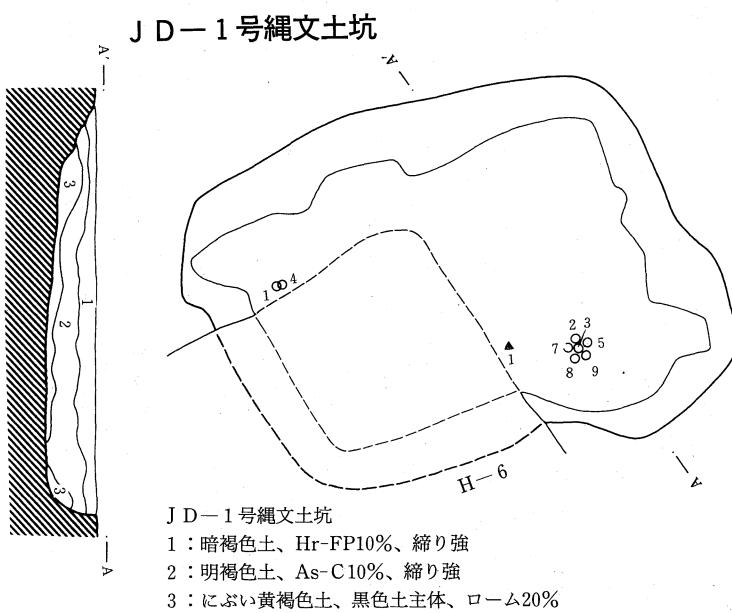


0-1号落込み址



0-1号落込み址

- 1 : にぶい黄褐色土、Hr-FP15%、ローム粒若干含む
1a : にぶい褐色土、Hr-FP10%
2 : 暗褐色土、As-C20%、締り強
3 : 黒褐色土、締り弱、炭化物10%
4 : にぶい黄褐色土、ローム粒30%



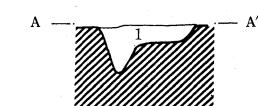
D-1号土坑

D-2号土坑

D-3号土坑



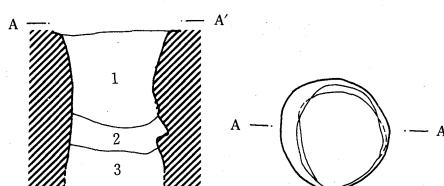
W-1号溝址



W-1号溝址

- 1 : 黒褐色土、As-B、Hr-FP若干含む

I-1号井戸址



I-1号井戸址

- 1 : 褐色土、締り、粘性無し
2 : にぶい黄褐色土、ローム粒15%
3 : 褐色土、径1.5mmの砂20%含む

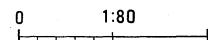
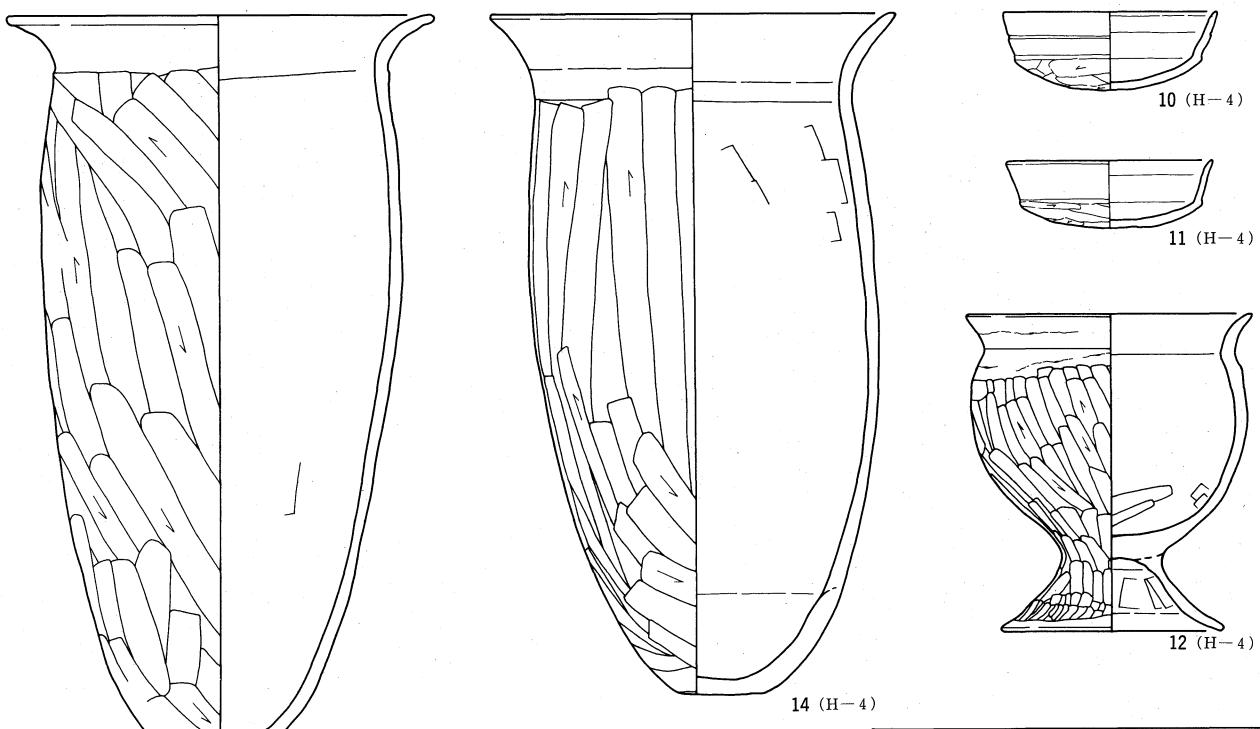
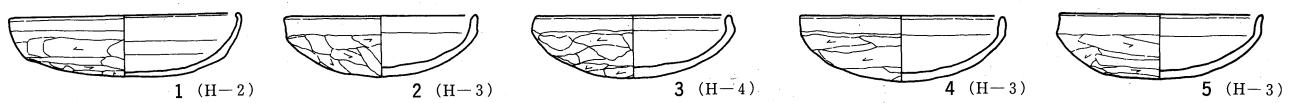
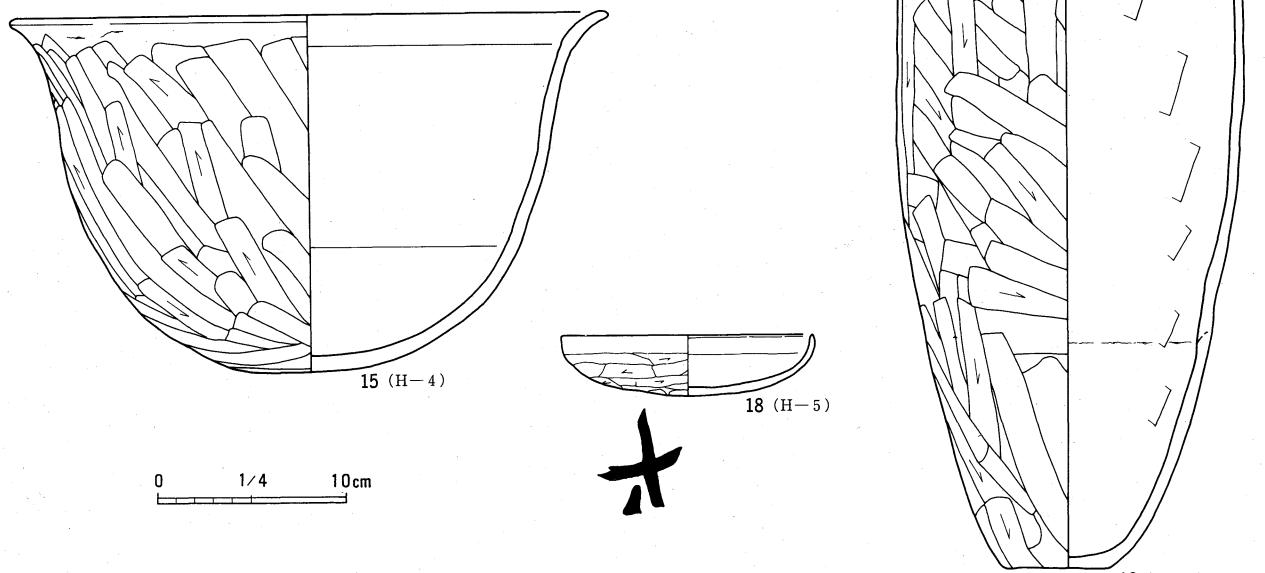


Fig. 8 H-17号住居址、O-1、JD-1、I-1、W-1、D-1～D-3



13 (H-4)



0 1/4 10cm



Fig. 9 古墳～奈良・平安時代の土器(1)

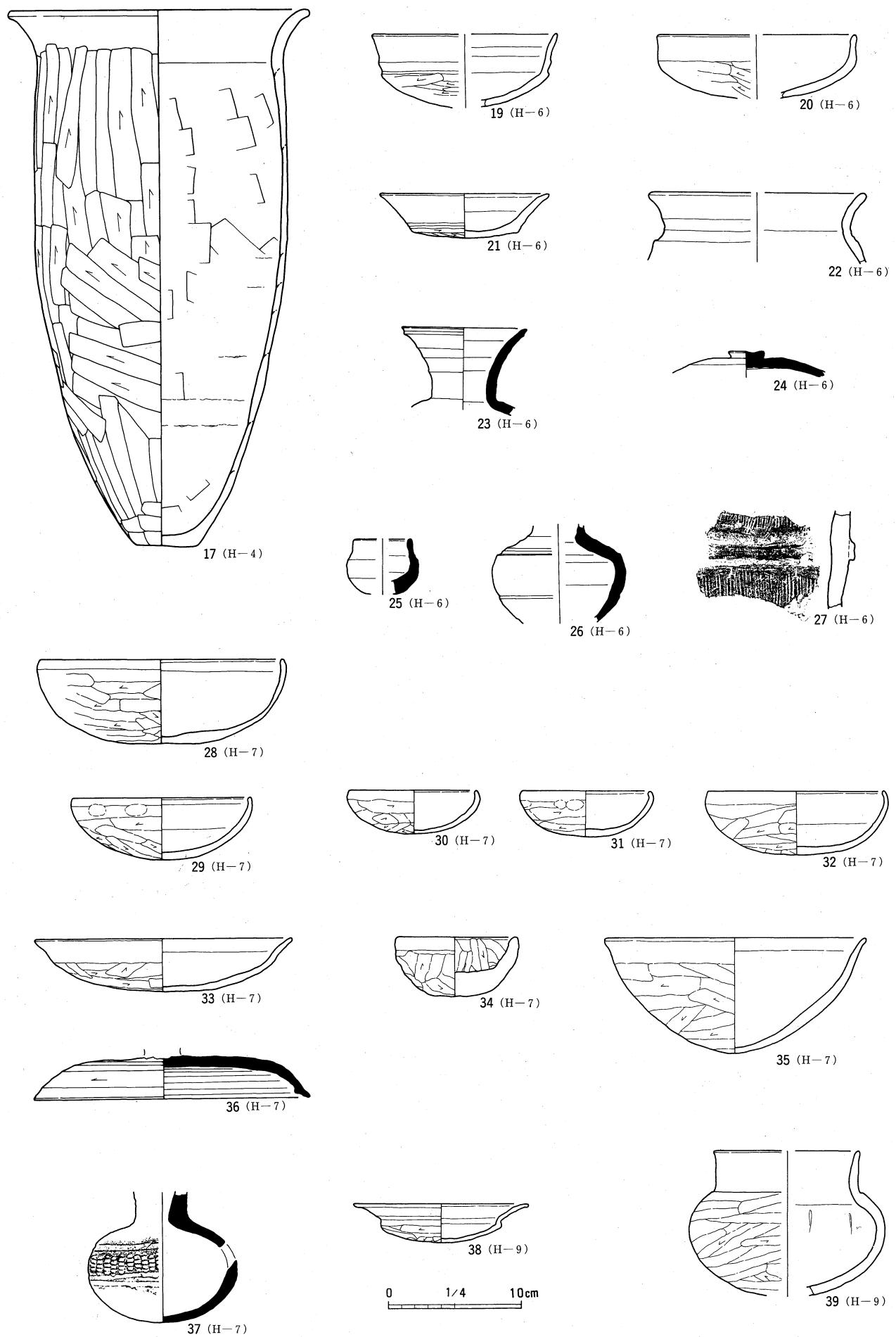


Fig.10 古墳～奈良・平安時代の土器(2)

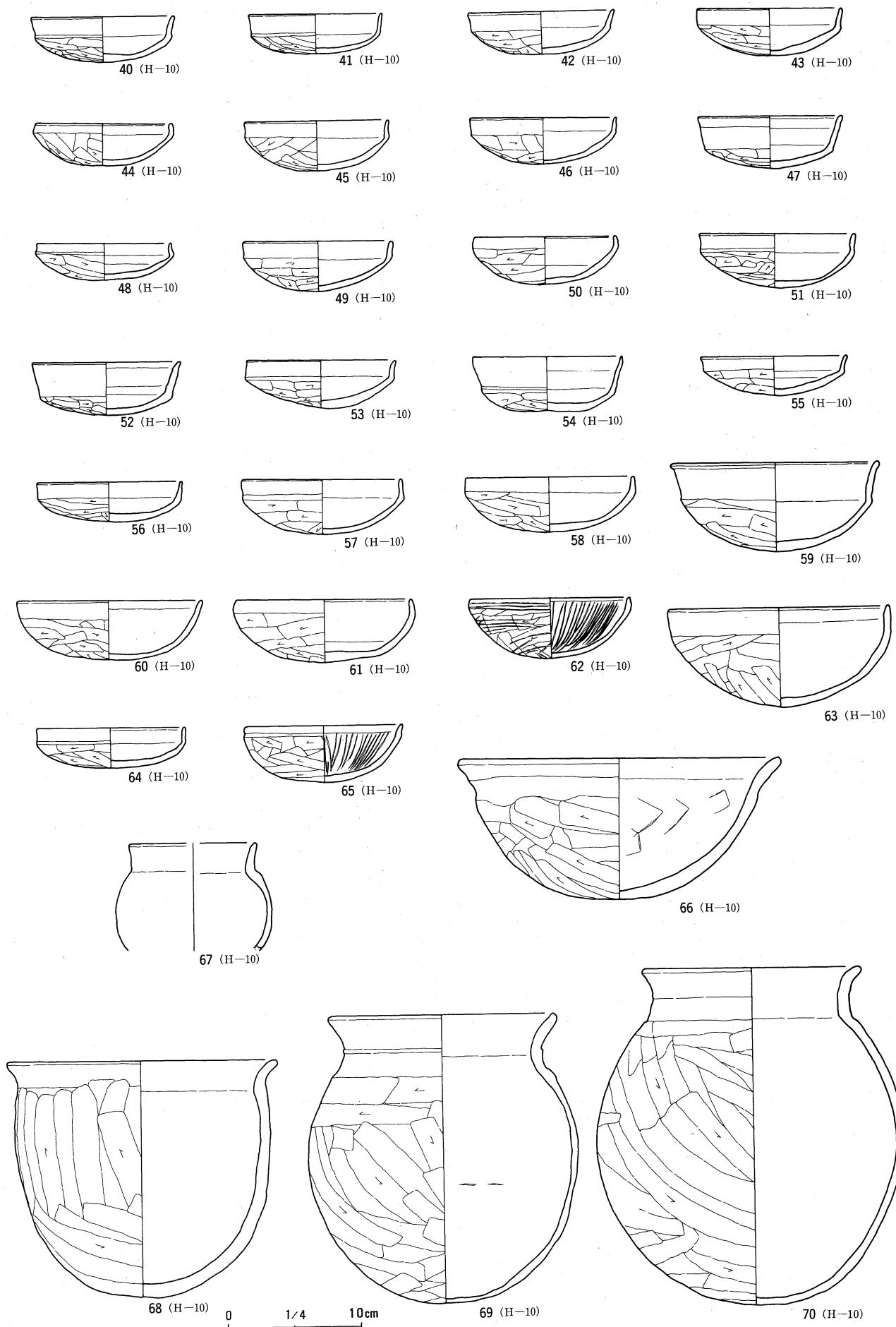


Fig.11 古墳～奈良・平安時代の土器(3)

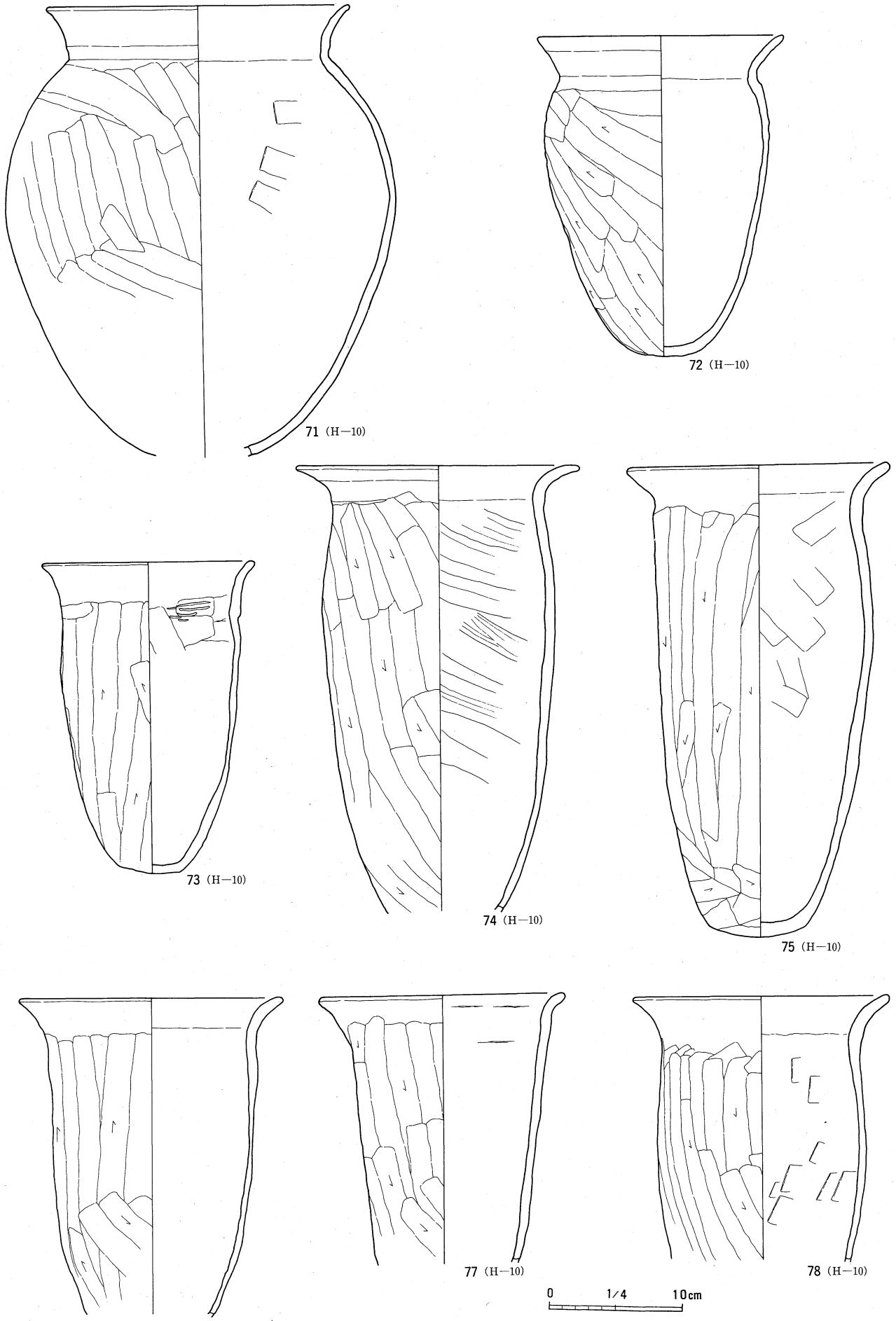


Fig. 12 古墳～奈良・平安時代の土器(4)

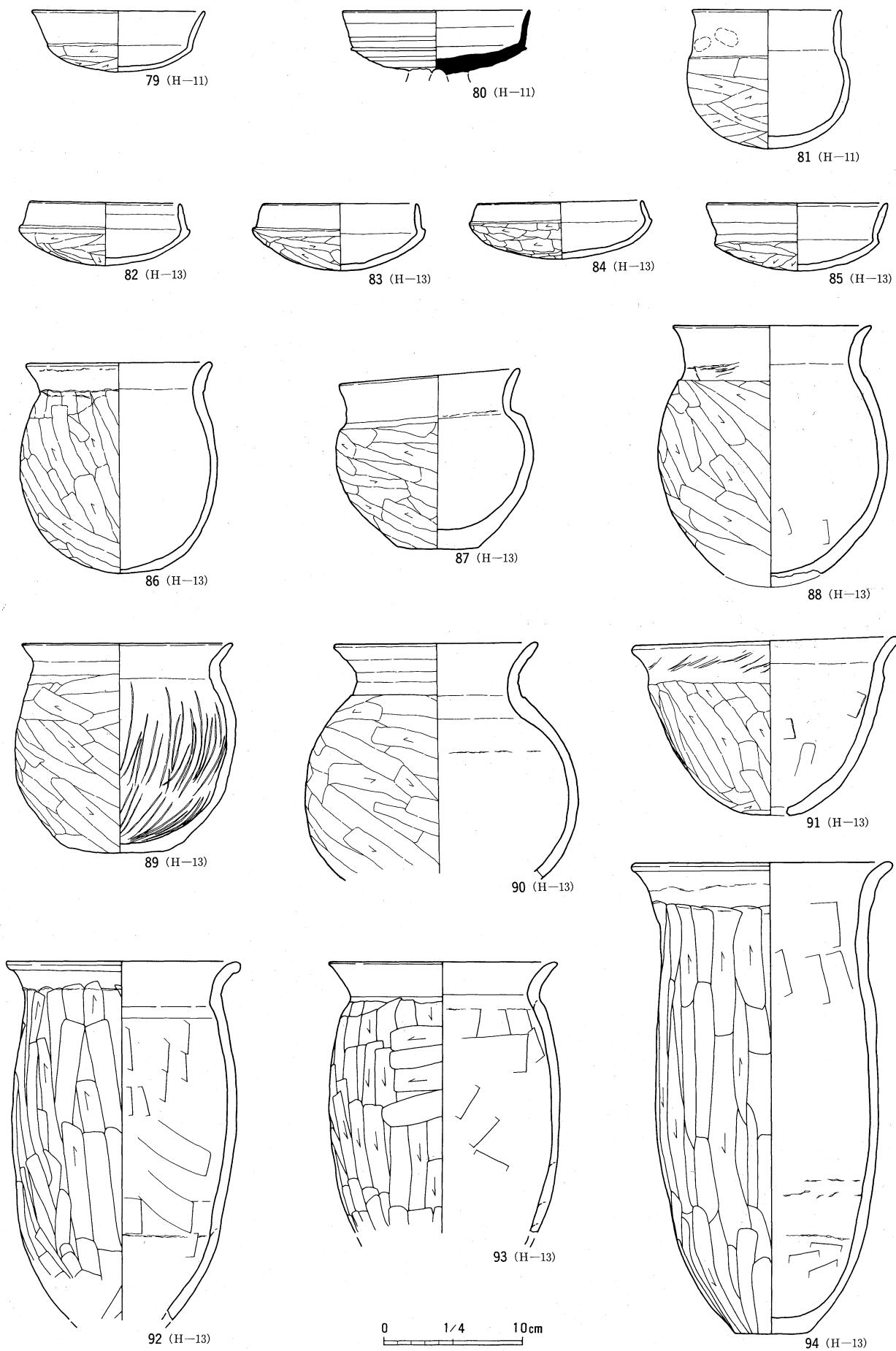


Fig.13 古墳～奈良・平安時代の土器(5)

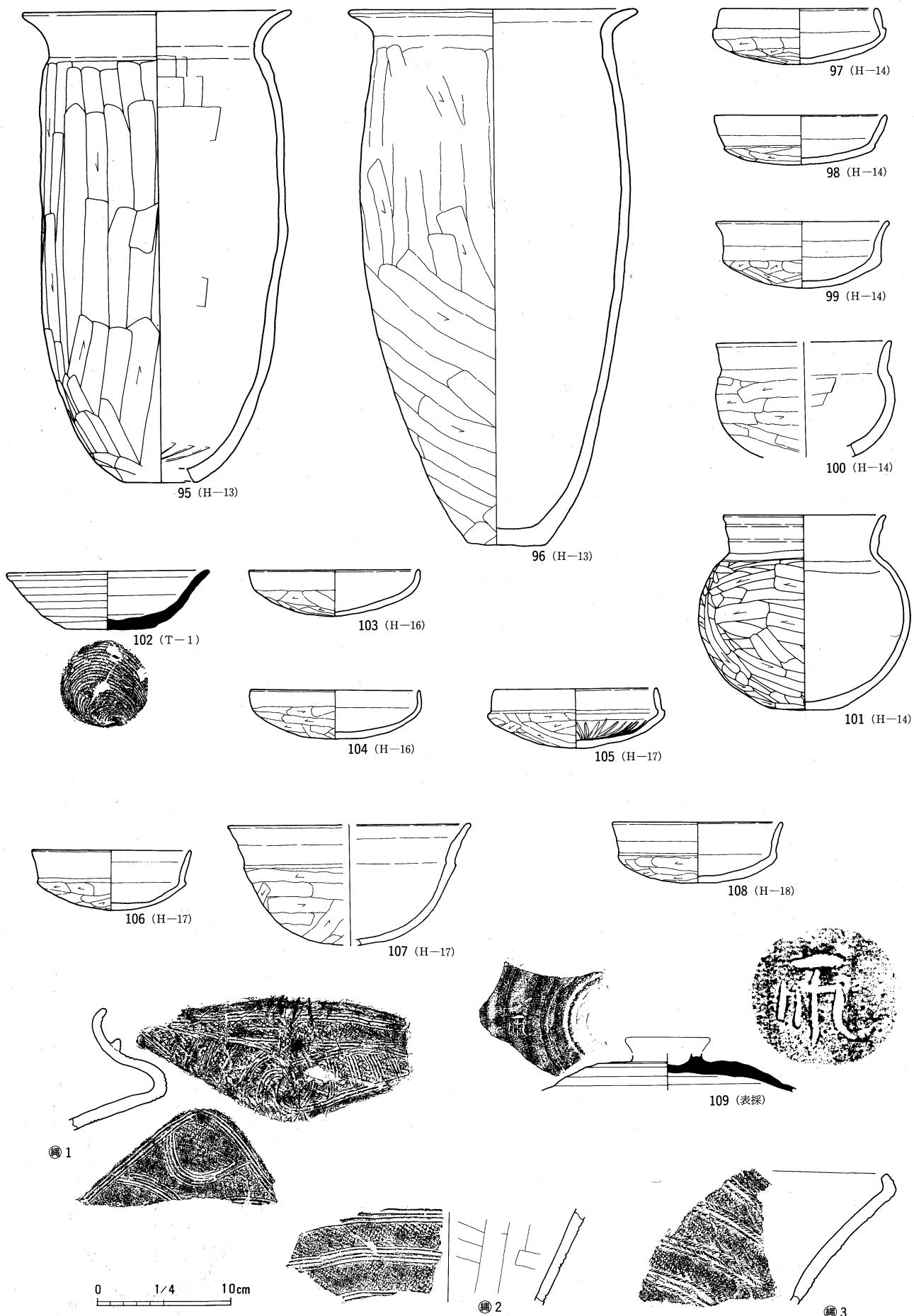


Fig. 14 古墳～奈良・平安時代の土器(6)、縄文土器(1)

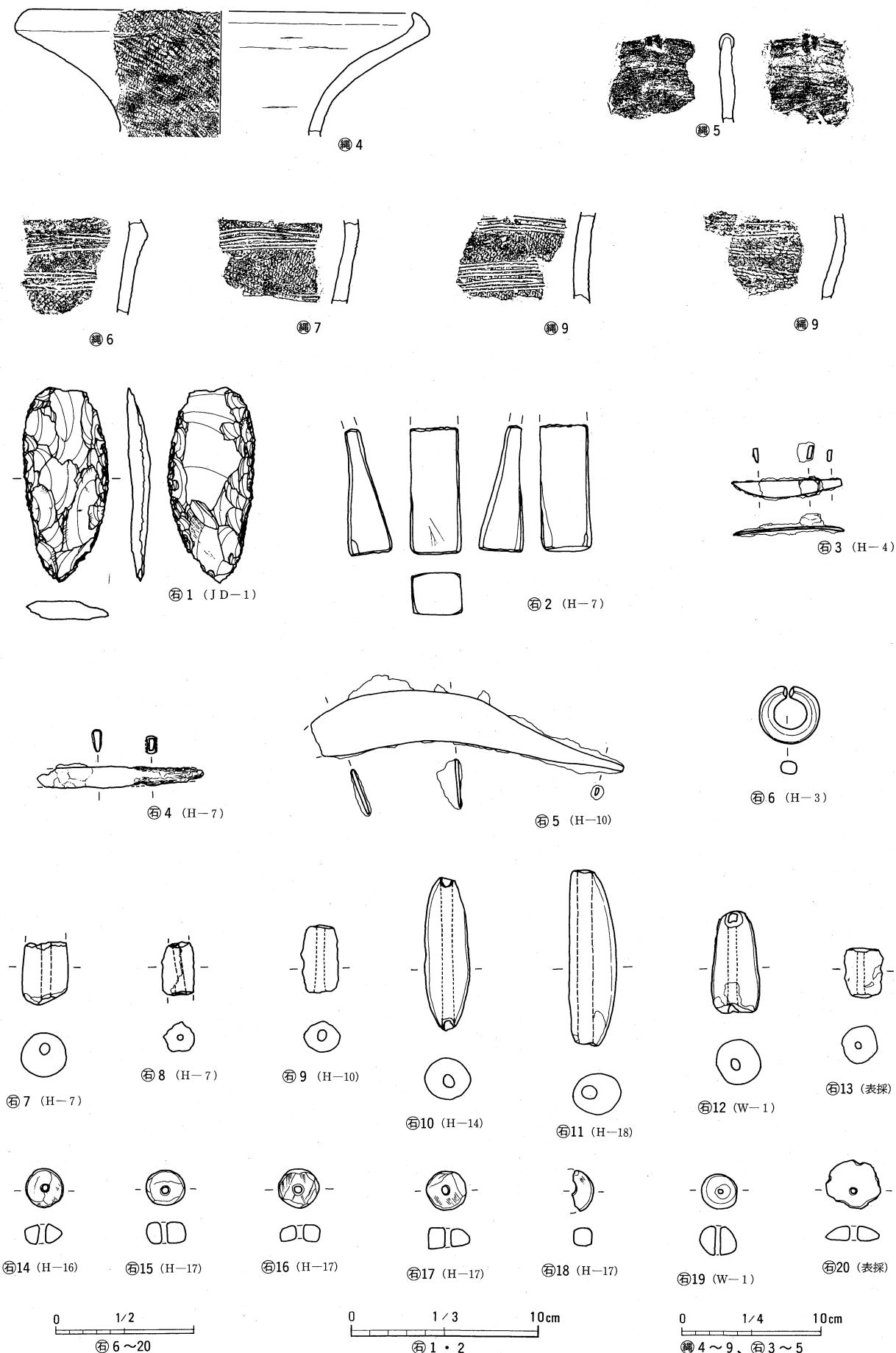
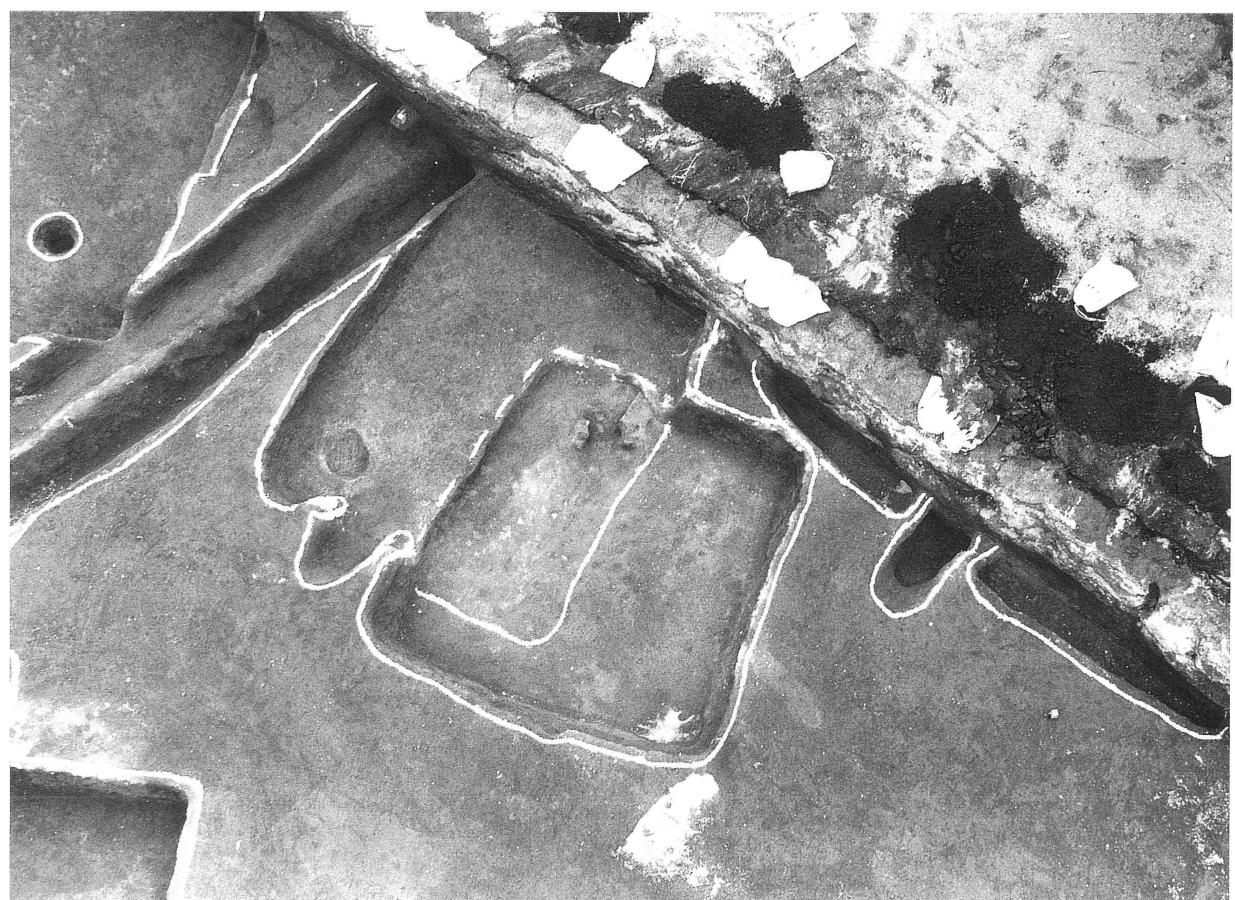


Fig. 15 繩文土器(2)、石器・金属器・土製品



遺跡全景（東から）



H-1・2・18号住居址（北東から）



H-2、H-18号住居址（西から）



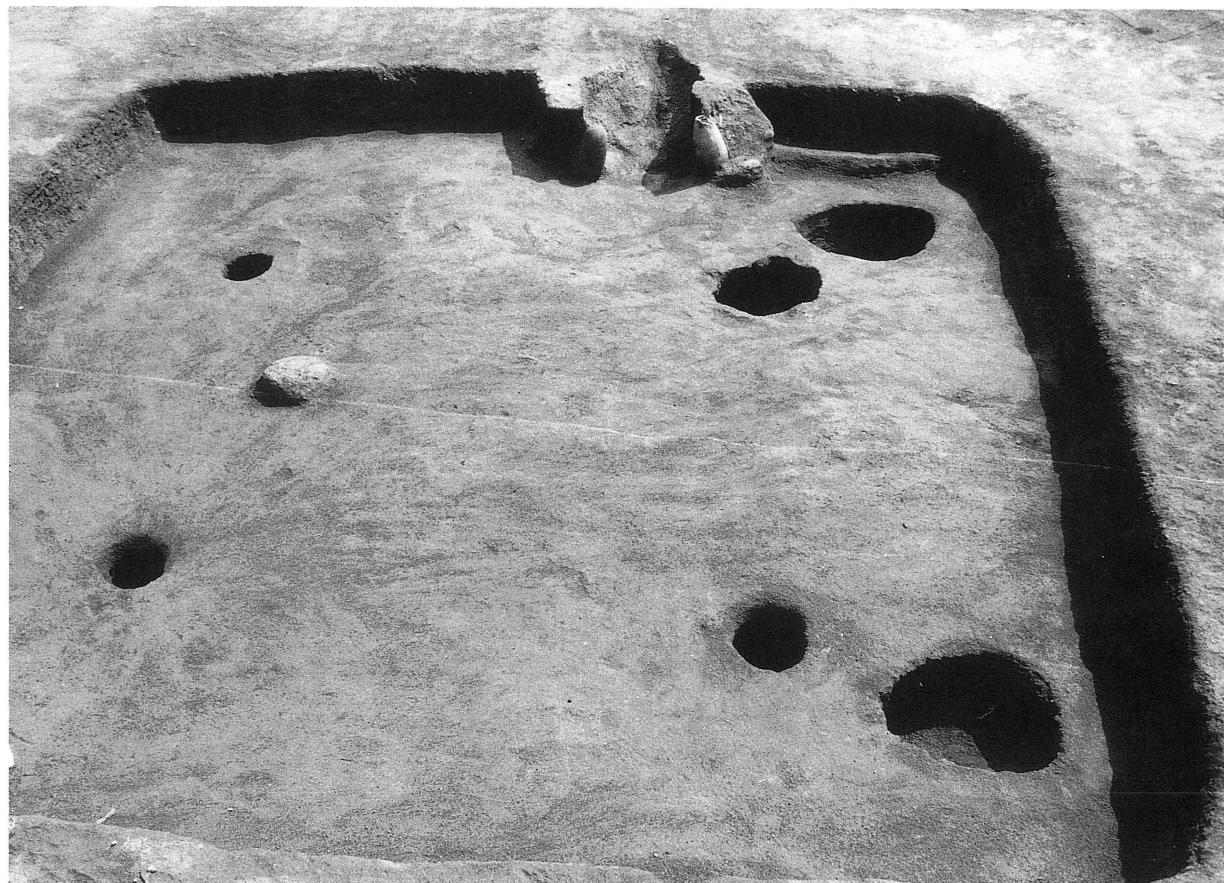
H-3号住居址遺物出土状態（東から）



H-4号住居址炭化物出土状態（北東から）



H-4号住居址竈（西から）



H-4号住居址（西から）



H-4号住居址台付甕出土状態（西から）



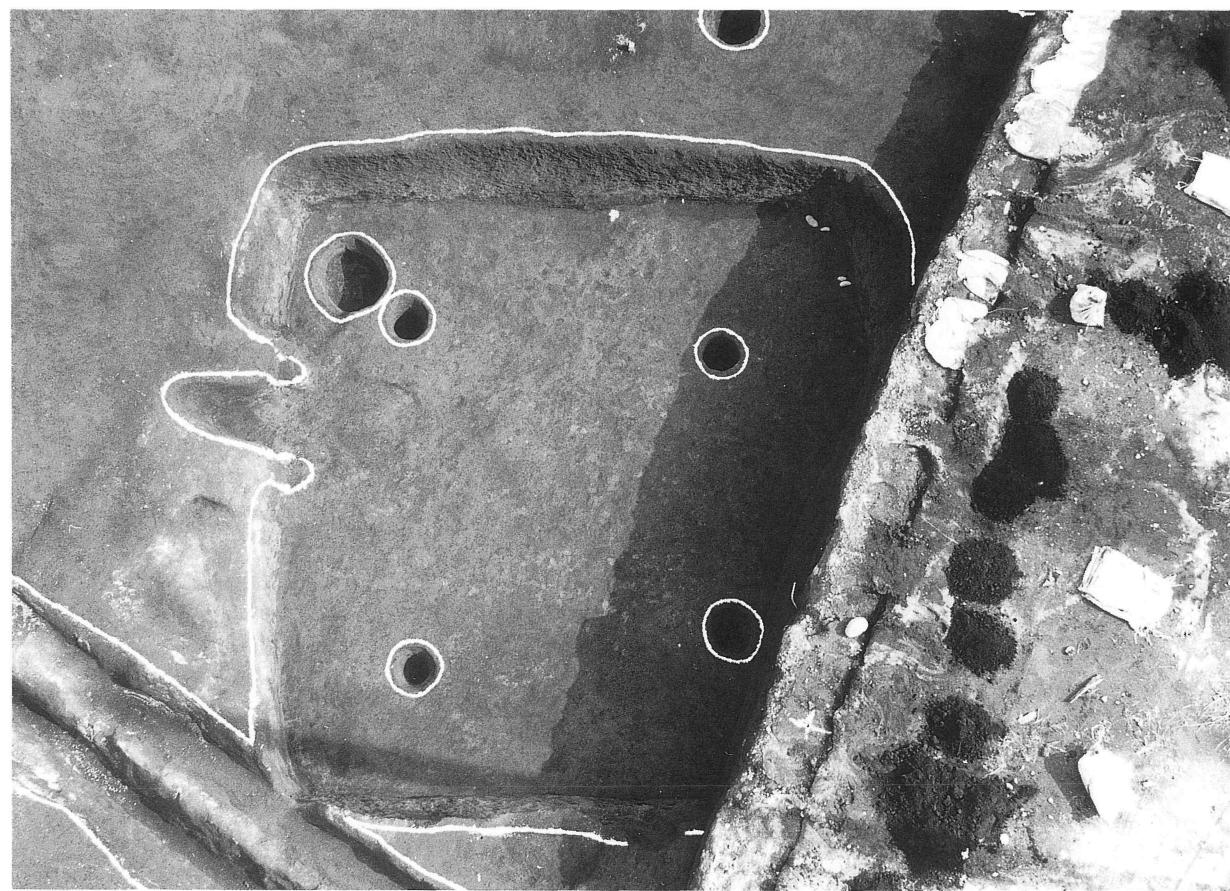
H-5号住居址（西から）



H-6号住居址（西から）



H-6号住居址竈東西セクション（南から）



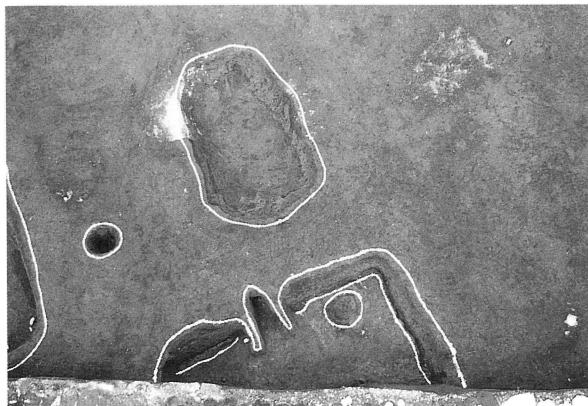
H-7号住居址（北西から）



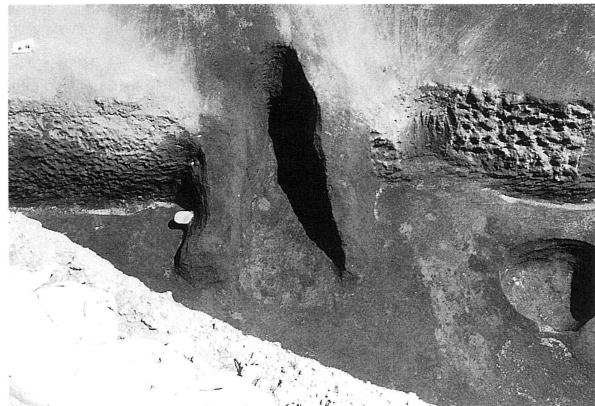
H—7号住居址はそう出土状態（西から）



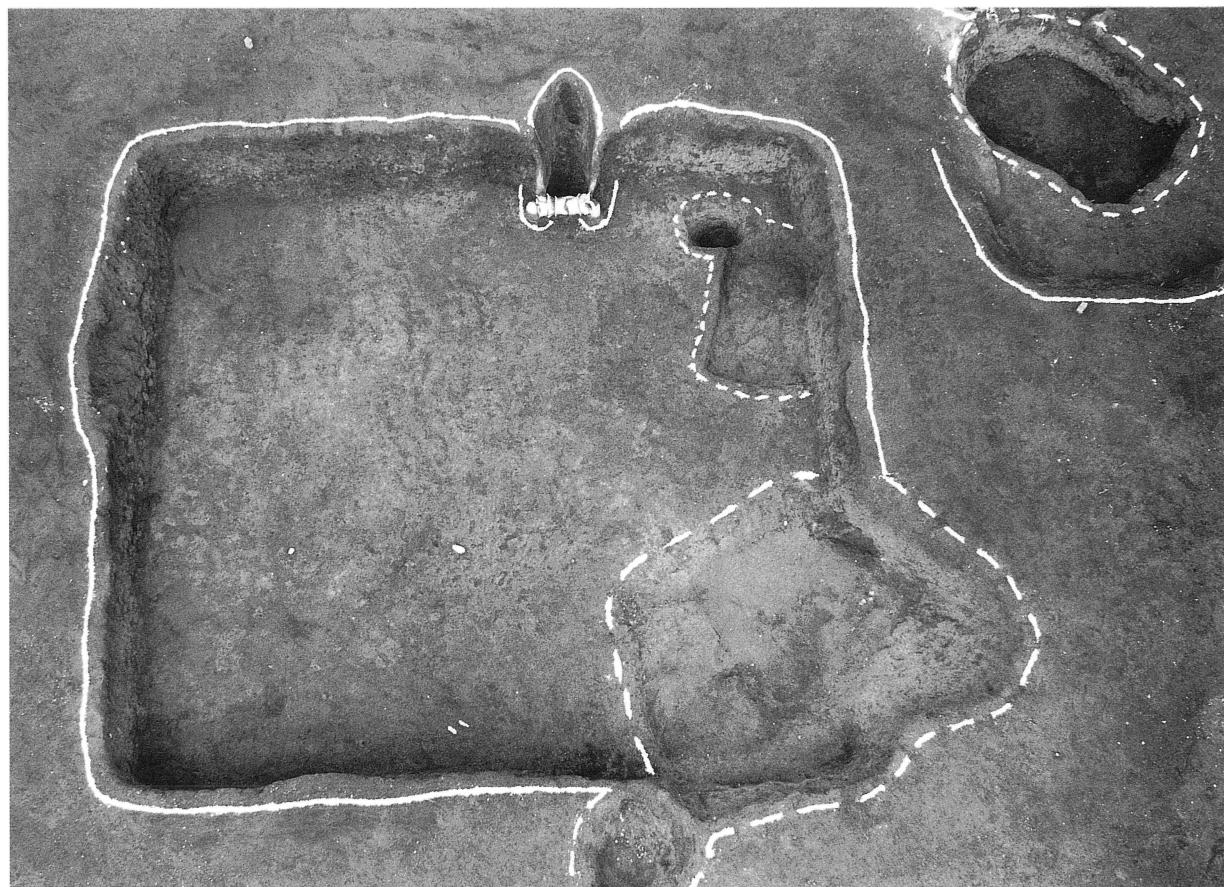
H—7号住居址遺物出土状態（西から）



H—9号住居址、O—1号落込み（西から）



H—9号住居址竈（西から）



H—10号住居址（西から）



H-10号住居址（西から）



H-10号住居址竈（西から）



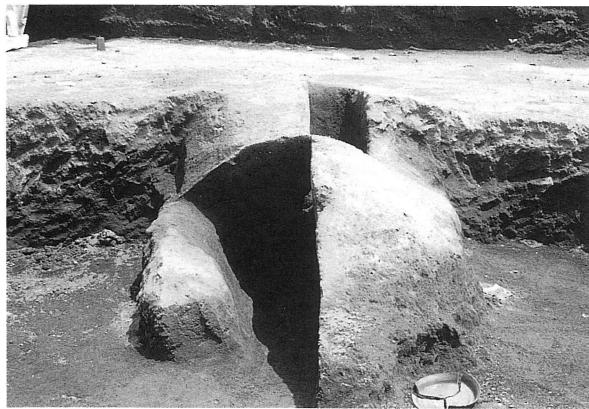
H-10号住居址竈セクション（南西から）



H-10号住居址遺物出土状態（東から）



H-11号住居址（西から）



H-11号住居址竈南北セクション（西から）



H-11号住居址遺物出土状態（東から）



H-13号住居址（南から）



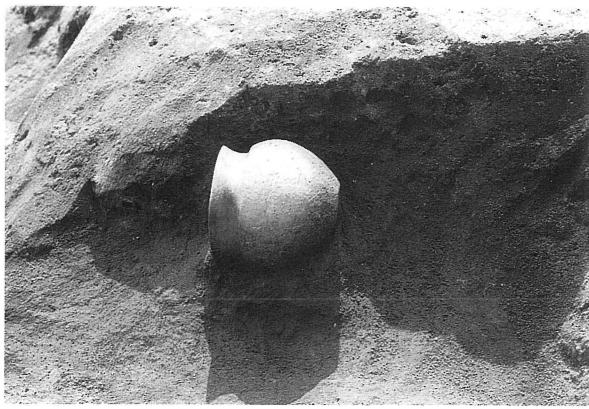
H-13号住居址竈周辺（南から）



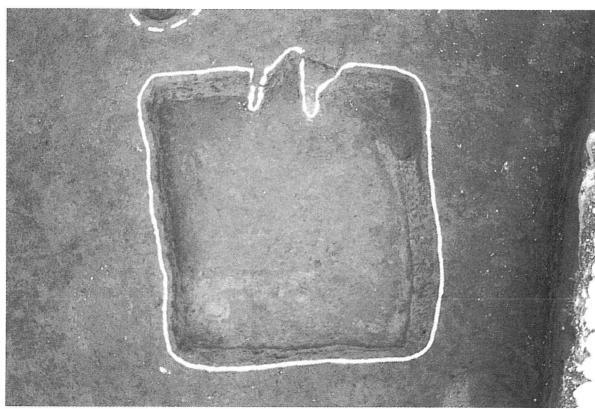
H-13号住居址竈遺物出土状態（北西から）



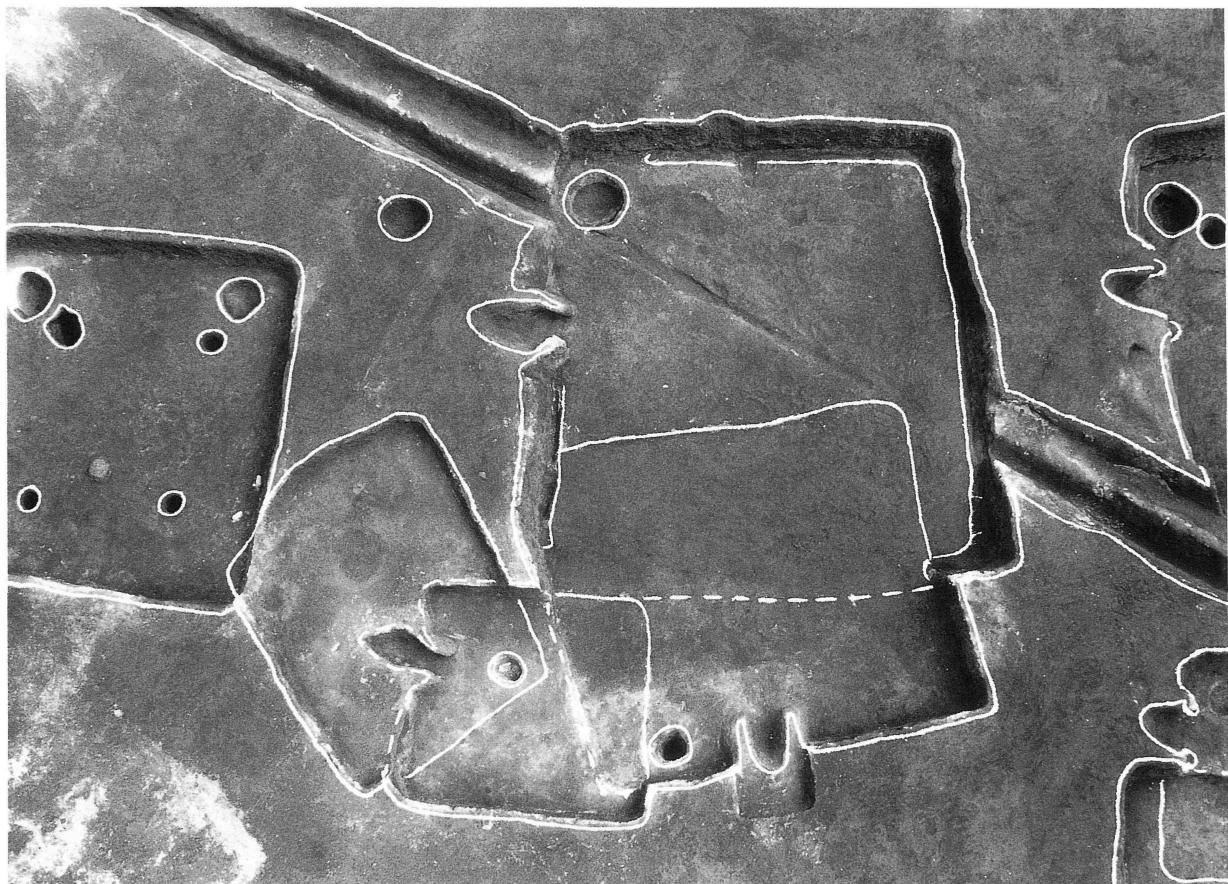
H-13号住居址竈遺物出土状態（南東から）



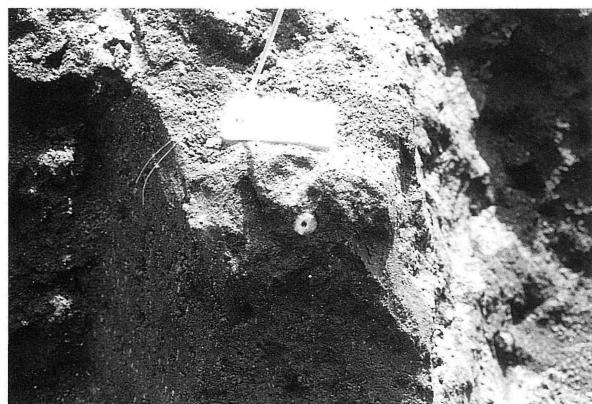
H-13号住居址遺物出土状態（東から）



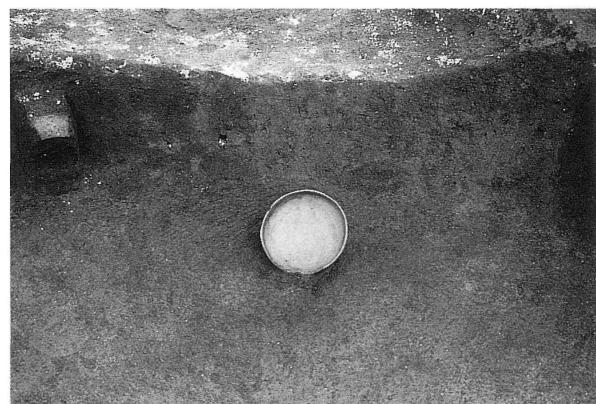
H-14号住居址（西から）



H-16・17号住居址とT-1号竪穴状遺構（北から）



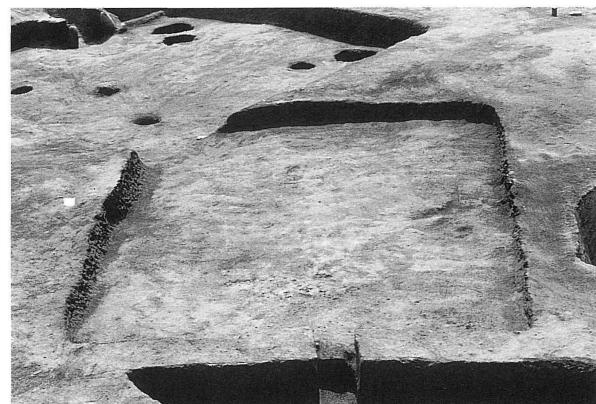
H-16号住居址臼玉出土状態（北から）



H-16号住居址遺物出土状態（北から）



H-17号住居址臼玉出土状態（北から）



T-1号竪穴状遺構（北西から）



J D-1号绳文土坑全景（西から）



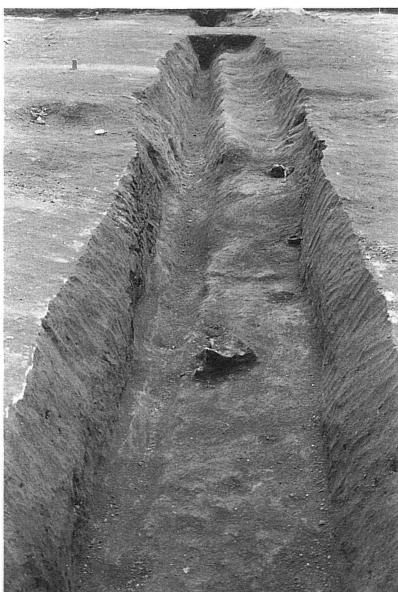
J D-1号绳文土坑遺物出土状態（西から）



J D-1号绳文土坑南北セクション（西から）



I-1号井戸址（南から）



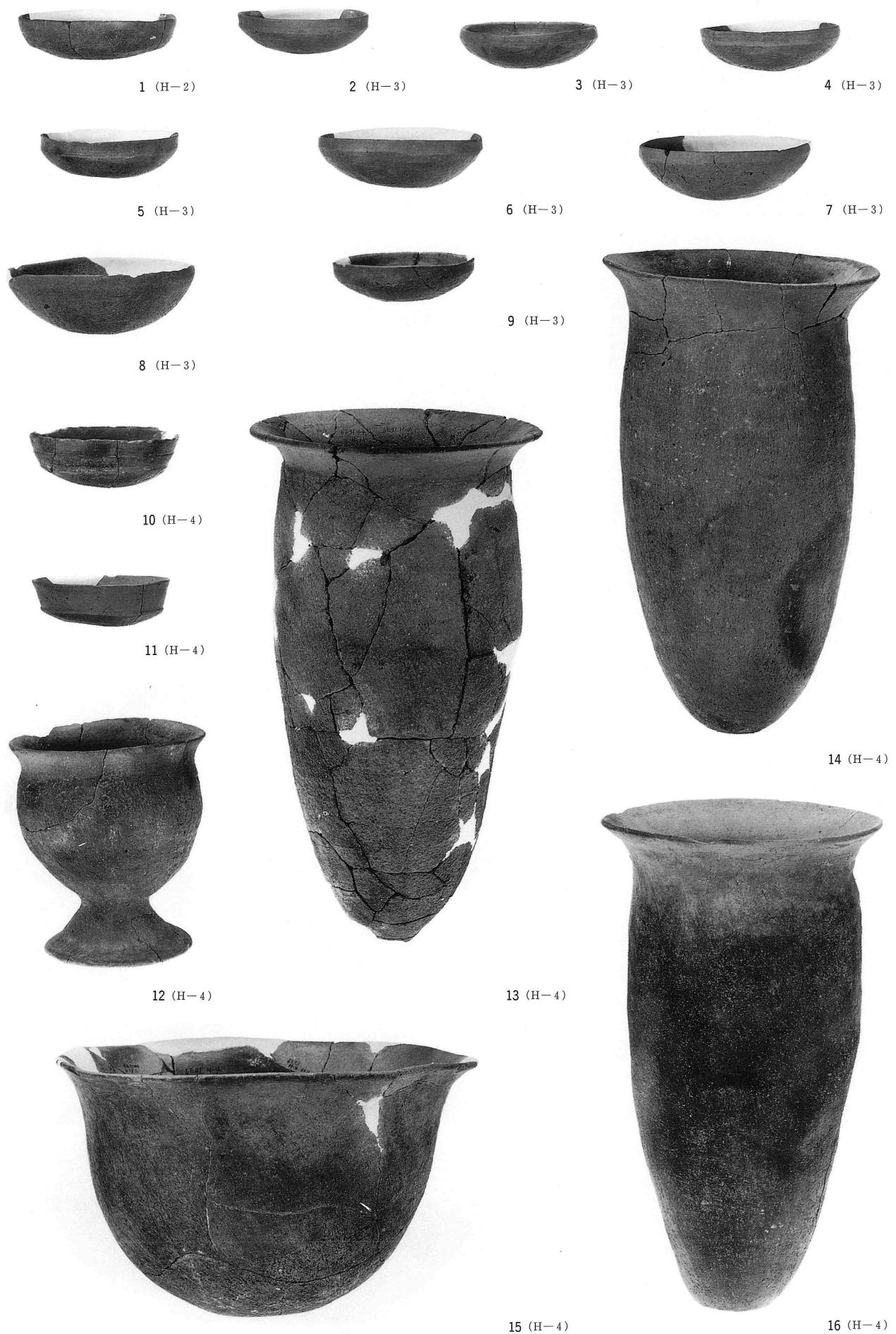
W-1号溝址（西から）



遺跡地より南東を望む



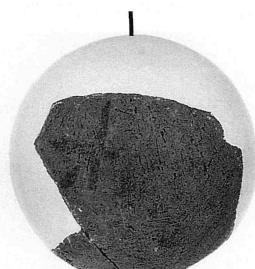
遺跡地より北を望む



古墳～奈良・平安時代の土器(1)



17 (H-4)



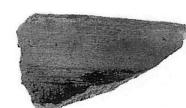
18 (H-5)



19 (H-6)



21 (H-6)



22 (H-6)



23 (H-6)



24 (H-6)



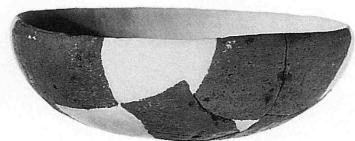
25 (H-6)



26 (H-6)



27 (H-6)



28 (H-7)



29 (H-7)



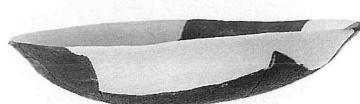
30 (H-7)



31 (H-7)



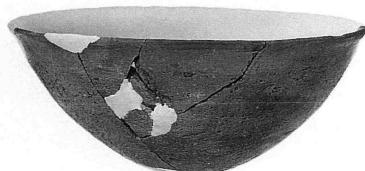
32 (H-7)



33 (H-7)



34 (H-7)



35 (H-7)

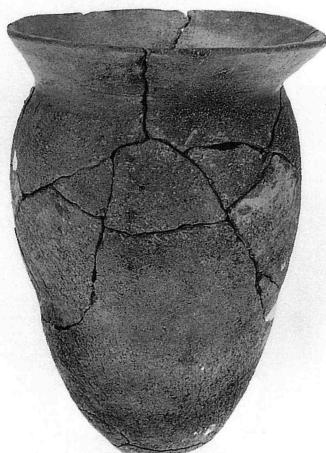


古墳～奈良・平安時代の土器(3)



68 (H-10)

69 (H-10)



72 (H-10)



73 (H-10)

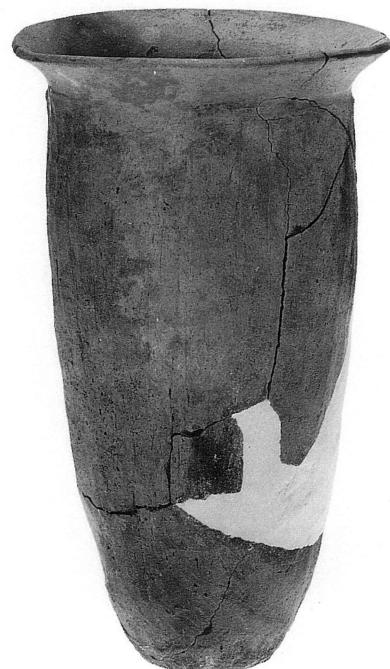
74 (H-10)



71 (H-10)

70 (H-10)

古墳～奈良・平安時代の土器(4)



75 (H-10)



76 (H-10)



77 (H-10)



78 (H-10)



79 (H-11)



80 (H-11)



81 (H-11)



82 (H-13)



83 (H-13)



84 (H-13)



85 (H-13)



86 (H-13)



87 (H-13)



88 (H-13)



89 (H-13)



90 (H-13)



91 (H-13)



92 (H-13)



93 (H-13)



94 (H-13)

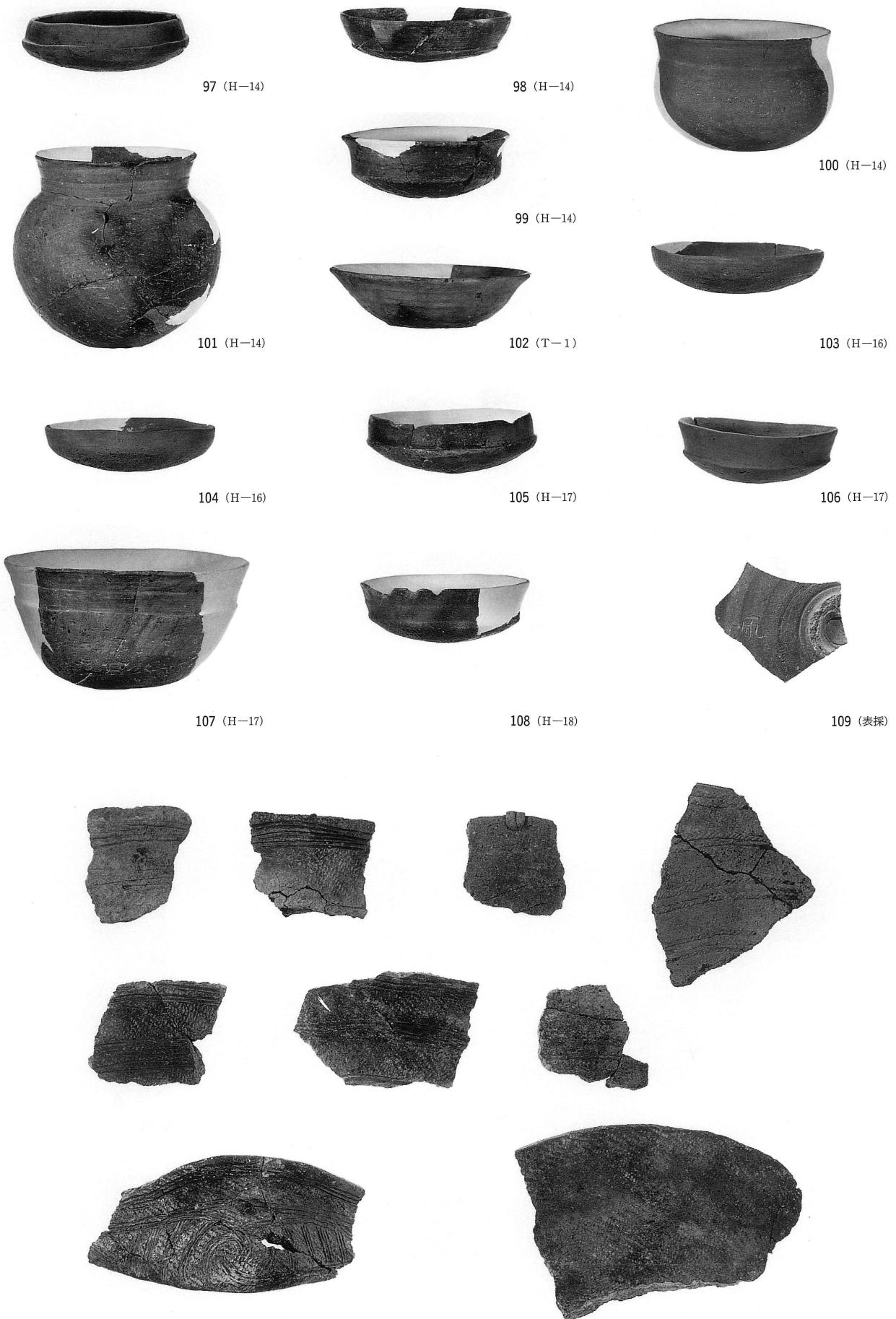


95 (H-13)



96 (H-13)

古墳～奈良・平安時代の土器(6)



古墳～奈良・平安時代の土器(7)、縄文土器



石器・金属器・土製品

抄 錄

フリガナ	アラトアオヤギニイセキ
書名	荒砥青柳II遺跡
副書名	公共開発（学校用プール建設）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	狩野 吉弘 井野 誠一
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦1995年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 經			
アラトアオヤギニ 荒砥青柳 II	マエバシシニノミヤマチ 前橋市二之宮町1789番地他	10201	6E31	36°21'30"	139°10'15"	19940713 19940831	900m ²	学校用プール建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特記事項
荒砥青柳 II	土坑 住居 豎穴状遺構 溝 井戸	縄文時代 古墳時代後期 奈良・平安時代 中・近世 中・近世	縄文土坑1基 豎穴住居12軒 豎穴住居3軒 豎穴状遺構1基 溝1条 井戸1基	石器、縄文土器 土師器、須恵器、鉄器、臼玉、土 錘 土師器、須恵器 須恵器 特になし 特になし	なし

調査依頼者 前橋市教育委員会

調査主体者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

調査担当者 狩野吉弘 井野誠一

調査参加者 阿部シゲ子 飯島勝亥 飯島かつみ 岩木 操 神澤とし江 栗林伸博 小暮キン 越中 熱 小沼はつ
斎藤洋一郎 柴崎安浩 下境薰雄 下山清保 下山峯子 鈴木民江 須藤か津ゑ

荒砥青柳II遺跡（6E31）

平成7年3月17日印刷

平成7年3月24日発行

編集・発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

〒371 前橋市上泉町664-4

TEL 0272-31-9531

印 刷 朝日印刷工業株式会社

